

れしにも有るべからず、まして深川とあれば飛違ひたるなつかしかりにや、無理に取り寄せ侍らんは翁の本意には背きなん、堺は利休の産土といひ、其師紹鷗舊染の地なり、其昔海少し庭に泉の木の間哉といへる宗祇の發句を、利休感有りて、茶趣もとより此心なりと、堺の露地は其趣にて作られたり、然れば深川の露地も、海少し見えて、堺の庭に似たるぞなつかしきとの事ならん、なつかしきは強ちに露地にも寄るべからず、すべの調度食物の類の上につけても此觀は出でぬべし、又なつかしといふは古を慕ふ心のみにもあらず、親しむ義なり、假顔かりかほ肥懷かほとも古書に訓せり、此句の裏へ廻りて、例に翁の心骨を捜せば此支梁亭の露地が、りを始め、器物居所すべて華美を盡して、名聞めきたるが、翁の心には疎ましく思はれて、堺の庭こそなつかしけれと、よそに諷詠せられしなるべし、今の茶人は名聞名利自慢驕奢のみを事として、詞には殊勝地を作り、わび

のさびのと云へども、陰へ廻りては人の不善の噂を園の内の樂しみと思ふ輩は、翁の句意は、藪くふ虫なるべきか○按ずるに説叢の説むつかしくや侍らん。

貞徳翁の姿を讚して

をさな名や知らぬ翁の丸頭巾

何れの年の吟にや未知、菊の塵集に見えたり○萬々葉に、百庵曰く、知らぬ翁とよめる歌は、拾遺集雜下旋頭歌、ます鏡そこなる影に向ひて見る時にこそ知らぬ翁にあふ心地すれ、此後の集に三四首あり、其後種玉庵宗祇法師畫像贊の自詠に、「うつし置くは我影ながら世の憂さも知らぬ翁ぞ羨まれぬ」と詠す、貞徳老人畫像贊に、芭蕉が、貞徳翁の姿を贊して、と詞書して「幼名や知らぬ翁の丸頭巾、此句、幼名や不知翁といふ續きはよく聞え侍れど、貞徳の幼名勝熊、後に勝熊の音を以て逍遙軒と

菊の塵集は園女選、
或詩に
朝來笑向鏡中間、白髮
蒼顏汝是誰

滑稽太平記は浮生選、
季吟門人

海音集、宗紙の跋に
言水
金提げて知らぬ翁にむ
ら時雨

自稱せられき、蕉も吾祖先の幼名を知らざるは疎略なり○滑稽太平記に曰く、貞徳翁は松永彈正久秀嫡男妙顯寺に法印となつて永種といふ、下冷泉明融卿の息女と嫁し、還俗して貞徳を産めり、然るに永種は自然の才能にして、和漢は更なり、連歌も宗養門葉となり甚だ妙を得たり、洛陽衣棚に居住す、されば貞徳は名乗にて、假名は松永鯖左衛門と號せり、其頃太閤秀吉公連歌を逸せ給ふに、貞徳は執筆を勤め、細川幽齋の文庫も預り、歌など詠みて、延陀王丸或保童房又逍遊軒と云、長頭丸とも呼ばる、もとより優髪にして頭長き故の名なり○按ずるに、をさな名やとは長頭丸と云へる童らしき名を指して云へるにや、下に丸頭巾と句作りせんが爲か、又載恩記に、貞徳十二三の時露地にて紹巴に逢ひしに、綿帽子を被きたるを遠くより見付けて、散々に叱られし、そのこはさに老年まで貞徳は頭巾をもせざりしは、其高恩の有難く思ひ侍る故なりとかや、されば

秘訣大概にも幼名勝熊
とあり
貞山傳書載恩池に勝熊
とあり

貞徳の篤實を譽めたる句なるか、知らぬ翁の詞は歌を出所なるべし、斯く聞く時は幼名やと切て、跡を一續に聞くべきか、百庵が云ふ如く聞きては、やと云へる切所いかゞ、句意もわからず○俳諧家譜に、貞徳松永氏幼名勝熊、壯年薙髮號曰松友軒名、逍遙晚年復束髮而童服、自曰延陀丸後改號長頭丸○按ずるに、芭蕉が貞徳の幼名を知る知らぬの論には及ばじ○説叢に曰く、此句、幼名や、といふやは、歎美のやにて切なり、百庵は、呼出しのや、口合のやなどの類と思へるにや、いぶかし、幼名はよく知りたるなれば、斯く五文字に歎美せしなり、貞徳ほどの人の幼名知らぬ芭蕉にても無し、句意は幼名は勝熊丸と云ひし人なれども、古き人なれば、逢ひもせず、依て、知らぬ翁と歌の詞を裁入れて、其像を動かさずして、其幼名はもとより猛くすさまじきが、後に長頭丸と世に稱せらるゝ此道の世話やきのやさ翁なれば、慕はしく尊くも思ふに、今此圖を見るに、更に對面せし

思ひして、丸頭巾の俵いよく古へ戀しきと、餘情を含めたる句なり、幼名は知らぬといはゞ不知なり、幼名やと歎美して、其慕ふ心を籠めたる故にこそ句とはなれり、斯る虚實を知らざるも亦世に多かりき○按ずるに、説叢は勝熊の名をいひ、又頭巾着たる像の贊と見たるが、西武真蹟のものに、髪を唐輪に結ひたる像あり、すべて頭巾の像は是まで見及ばず、有るやも知らず、しかし戴恩記の趣を見れば、頭巾の像は如何に侍るべき。

大通庵の主道圓居士芳名を聞くこと

親しきまゝに見えん事を契りてつひに其日を待たず初冬一夜の霜と消えぬ今日は尙ひとめぐりにあたりぬといふを聞きて

其方を見ばや枯木の杖の長

何れの年の吟にや未知、小文庫に見えたり、句は其かたち見ばや枯木の杖の長と有り、句選誤れるや○泊船集にも小文庫と同じ○師走袋詞書に、大通庵道圓居士の芳名を聞き見えん事を思ひしに初夜の霜と消えしに一めぐりに遣はずと有り、此句、枯木としては季無し、枯野の誤なるべし、其人の姿は無けれども、杖の尺を見れば其姿思ひやらるゝなりと深く慕ふ心なり○按ずるに、小文庫泊船集ともに枯木とありて冬の都に見えたり。

御影講や油のやうな酒五舛

何れの年の吟にや未知、泊船集に有り○句解に、日蓮上人の報書に、新春一斗筭三本油のやうな酒五升南無妙法蓮華經と回

禪林類聚に、婆子燒庵枯木倚寒岩、三冬無暖氣、又曰、摧殘枯木倚寒巖、幾回逆、春不戀心、増山の井沼法書に、木枯を冬とし又柳枯も冬なり、まして通俗志に名木枯は冬なりと有り、富士土産に、東湖不二、孤鼠獨居るかれ野哉、元祿五年

向いたし候、又翁一とせ許六亭に旅寢の頃此報書を讀みて、新
 麥に笥はよき發句の懸合なりとて、人々按じけるに、新麥や笥
 時の草の庵と句作りて、許六にたびけるよし、晉子が、謠は俳諧
 の源氏なり、と申しけるに、斯るをかしみ寂しみの取所なるべ
 しと見えたり。○按ずるに、句解に、謠は俳諧の源氏と其角が申
 したるも斯る可笑みを稱美したる文體覺束なし。是は雜談集
 に曰く、諷は俳諧の源氏なりと、是を一向の格意として、凡そ百
 番のうちにて、目に立つ詞耳近き雲に起き臥す頭巾とくきんもあり、斯
 様に言を工みにし、自句他句のわきまへも無くものせしかば、
 いつその程に自他ともに珍しからず所爲やむを得ずて、十とせあまり此
 方、誰と無くいひやみけるを、風體の移りかはるに任せて、只お
 ほ方に思ひくれける折節、江口の里にて、やどれとは御身いか
 なる人時雨 梅翁と云句を承りて、其實を捨てざる所、肌骨に
 入みて侍れども、再び取附くべき詞も無かつし所に、大津にて

花月の謠に、ふじの高
 根にのぼりつゝ、雲に起
 臥す時もあり
 峯入や雲に起臥すと申
 小な

松江頼入道維舟

三輪の颯、御身いかな
 る人により

船舟の颯に、船頭ど
 の、元祿四年の雜談集
 に十とせ余り此方とい
 ふは、延寶の末天和の
 はじめ、
 貞享五年の笈の小文に
 扇にて酒波む陰や散
 櫻 はせを
 元祿二年の奥の細道に
 むざんやな甲の下の
 きり／＼す
 此句去來抄に始めは、
 あなむざんやな、と有
 りした、あなの二字を
 省きたりと有り

「雪の日や船頭どの、顔の色 其角」と申しける次の年の春花
 の陰うたひに似たる旅寢哉 はせを」と聞えけり。然らば章な
 く俳諧の諷はれぬべきことを思ひ立て、憶芭蕉翁、月華や
 洛陽の寺社残りなく 其角と見えたり。元祿の頃は勿論謠を
 俳諧の源氏ともてはやす事すたれる事其角が詞書に見るべ
 し。此解に、蓼太謠は俳諧の源氏と稱美したる文體予無覺束と
 は此謂ひなり。

えびす講酢賣に袴着せにけり

元祿七年の續猿蓑集に、着せにける、とあり。○十六篇に、不易の
 句、ふり賣の雁あはれなり夷講流行の句、えびす講酢賣に袴着
 せにけり。不易は千歳不易の風俗なり、流行は時々流行する
 變化自在のかたちなり、たとへば不易は衣冠を調へて勤むる
 が如く、流行は家に歸り、其衣冠を脱ぎすて、今日の用を足し、

いきゝにすぐるが如し○師走俗に遊興酒宴のあまり酔はじかみの狂言などせし時の句と見えたり、さもなく尋常の酔賣の袴着たるばかりにては面白からず、福人の會なれば、似もつかぬ酔賣などにも袴着せけるよと一興せられし體なり○按ずるに、狂言せしは知らず、只酔賣に袴着せたるを見れば狂言の體をも思へるか、又職人盡しの畫には烏帽子袴着せたるあれば、それ等の古雅をも思ひ出せるにや。

ふり賣りの雁あはれなりえびす講

元祿七年の炭俵集に、神無月廿日深川にて即興、此句の脇降てはやすみ時雨する軒 野坡第三番匠が櫓の小節を引きかねて孤屋其外利牛と四吟の歌仙あり○白氏文集に、九江十年冬大雪、江水生氷樹枝折、百鳥無食東西飛、中有旅雁聲最饑、雪中啄艸氷上宿、翅冷騰空飛動遲、江童持網捕將去、手携入市生賣之、我

白氏文集卷十二

本北人今譴謫、人鳥雖殊同是客、見此客鳥傷、客人

水ばなにまこと見せけり御取越

何れの年の吟にや未知、或人所持の書簡に、此間は御帖之處折節瀬田へ參居候而不能即答、非本意存候彌御堅固御勤仕之旨珍重存候然者御門主様御尋之由に而發句の事被仰置候さのみ替りたる句にも無御座候得共任御意申上候水涕に信と見せけり御取越如此御座候今日幸便御座候故此中の御報旁如斯候尙委事は御下之時分ゆるくと可申承候愚慮へも時ならず客來候間危書以及御報候恐惶謹言 極三日 明石主水様 はせを、と有り。

霜月深川の舊草にかへりて
都出て神も旅寢の日數哉

己が光は元禄五年車磨
選

元禄四年の吟なり。むつ千鳥に、末の十月下旬東武に赴く、と有りて此句見えたり。○己が光に、翁恙なく霜月初五日むさし野の舊草に歸り申さる、珍らしく嬉敷朝暮敲戸の面々に對して、と前書有りて此句見えたり。○或行脚の僧此眞蹟駿州沼津の驛窪田十左衛門對江所持、長月の末つかた都を出で神無月三十日に近き頃沼津の驛に至る、宿の主の望に任せて風流もだし難く筆を走らす、と前書あり。

あら何ともな昨日も過ぎてふぐと汁

延寶五年桃青三百員に、あら何ともなやと有りて、寒さしさつて足の先迄 信章、居合拔霞の玉や亂すらん 京信徳と脇第三ありて三吟の百員なり。○俳林良材に、我が道三たび世にさかりなるや、此翁の方寸からびたる筋骨に出て、一とせきのふも過ぎてふぐと汁といふ句を設け、五文字を置侘びて、あら何

詠に、あら何ともなや
候

ともな、の七字を得られつる、侘屈の體をあらため、誰やらのかたちに似たりと年立ちかへるはじめの日、風をうつし俗をかへて數多の星霜を布袋の禪にならひ、都鄙の吟路を宗祇の履に足休めして、一度は雲に一度は雨に、行く川の流れ絶えずして、しかも、もとの水にあらざるをいさむの志を盡せしは、日東の杜子美なり、今の世の西行なり、西行は和歌によりて道をなせし人と、文覺は言ひ給ひけん、翁は俳によりて禪眼を具せられたりとか、とあり。○按ずるに、雜談集にいへる、詠は俳諧の源氏とは此頃の事にや。

熱田にて

あそび來ぬ鯰釣りかねて七里迄

貞享元年の吟なるべし、泊船集に、熱田にて、と前書あり。○熱田三歌仙に、貞享のはじめの年桑名に遊びて熱田に至る、と有り

て此句見えたり○按ずるに、桑名より熱田に至れること貞享元年の野さらし紀行にあれども此句は見えす、されども句調も其頃の句なるべし○萬葉集卷の九、水江之浦島兒之堅魚釣オビツリカサナカサケツリ鯛釣ウツリカサナカサケツリ及七日家爾毛不成而海界乎過而榜行下略

埋火や壁には客の影法師

元祿七年の續猿蓑集に有り○按ずるに、冬の日集に附合に、消えぬ卒都婆にすごくと泣く 荷兮影法の曉寒く火を焼て芭蕉と附けたる有り、其身の影のうつりたるを客といひたるにや○古文前集に、李白が詩に花下一壺酒、獨酌無相親、舉盃邀明月、對影成三人○杉風家藏眞蹟に、素堂が妹の身まかりける時、と前書あり。

埋火も消ゆや涙の煮る音

瓜畑集は岐阜住落梧遊なり、笈日記のうちに見えたり

花咲老人は貞徳の事なり

元祿二年の曠野集に、ある人の追善に、と前書あり○瓜畑集に、少年を失へる人の心を思ひやりて、埋火も消ゆや涙の煮る音と見えたり○うやむやの關に、埋火や泪の落ちて煮る音傳に云、是は花咲老人の忌日に我翁の綴れる句なり○按ずるに、笈日記岐阜の部に、落梧のぬしをさなき者を失へる事を悼みて「もろき人にたとへん花も夏野哉 翁と見えたり、若し此年の吟にや、笈日記少年を失へる人の心を思ひやりて、と前書あるより斯くは心づき侍る、うやむやの關に、貞徳の忌日とする事覺束なし。

ふるき世をしのびて

霜の後撫子咲ける火桶哉

元祿四年の勸進帳冬の部に前書斯く見えたり○小文庫にも、冬の部に前書同じく有り○説叢曰、師走袋に、昔世の亂れたる

時功有て用ひられし人も捨てられし火桶もあたゝかになりては撫子を植ゑられて其花が咲きしよとなり、是なでしこを今時めく人にたとへて、昔を忍ぶの句作なり、句解に云、此句は蒔繪なども元げかゝりたる火桶に、撫子植ゑたる蓬生の様と見るべし、古き世を忍ぶの詞書心を付くべし、霜さゆるあしたの原の冬枯にひと花咲けるかはら撫子師走袋深入して妄説多し、句解當れり、引歌よりどころ有るか、又蓬生おひしげりたる體なり、爰には蓬生の宿の様といふべき事なるをや、其器に對して古代を感慨せる句なれば此引歌にも寄るべからず、火桶の畫には然るべきにや、再考するに、此器桐火桶とも思はれず、全く世にいふ深草の陶器にして大なるもの、俗に手あぶりといふものならんかし、桐火桶はわたり五六寸に過ぎずとかや、草など植うべきものとも思はれず、當時の燒物にも火桶といふ有り、それらやうの古きを云へるなるべし、桐火桶に瞿麥

の花を畫く事は中古よりの事にや、後水尾院の御製とも又は東福門院の御好ともいひて、桐火桶に宿蒔きて瞿麥を繪きしもの有り、同じ形の香爐も畫様又同じ、いかにもそれは霜さゆるの歌によれるにや、古への火桶には其沙汰なし、清少納言枕の草紙には、ぢんの火桶に梨地したるとも、又ちくわうゑかきたる火桶ともあり、源順の家集には、天元元年十月初の亥の日右大臣の女御の火桶に餅ひくだもの盛りて内裏の女房につかはす、大臣此火桶ひとつ奉らせ給ふ、白金にして亥の子龜の形を作りて据ゑさせ給へるにくは、れる歌、わたつ海のうきたる山を負ふよりは動きなき世をいたゞけや龜、今按するに、是等さまざまの形古へは定まらざりけると見ゆ、霜の後といふ五文字聞難き故に、霜さゆるの歌を引きしにや、此歌は霜のいと白く草の葉に置きしを撫子の花と見立てたるにやあらん、霜の頃は枯れはて、其莖さへ無き草なり、返り花するもの

にても無し、然れば引歌も亦益なからん、霜の後の五文字は去りし冬の事を思ひ出したる詞とも思はるゝなり、霜の降りし且は此火桶も愛されしが、今は昔に人の捨てたる器となりて、此夏は撫子の草さへ植ゑてありけるよと觀じたるなり、誰人のもと愛せし器の果にや、盛衰は世の常ながら瞿麥の詞の響きにも感情深き句なり、石竹とも百合ともあるべきを撫子の季立動かざるものなり、澹齋此句の評に、是は冬の季にや入るべからん、上に、霜の後、といひ、下に、火桶、と二つ冬季を躰に取りていひなせしからは、瞿麥はよせ物にて有るべし、其の故は朗詠集の菊の詩にも霜蓬老鬢三分白、云々、此花開後更無花と元稹が作れりけるも、秋の末に千種の花も末なる頃、菊は咲き出で、この花の次には咲出づる花も有るまじきといふなり、其の如く此句も冬になり霜の降りたる後は千種の花も無き頃しも、火桶の火のはなやかに起こりたるを花と見なして、なで

澁々云、咲ける火桶哉とは、横かすと百庵云賦に笑ふべきなり、咲けること哉火桶と聞く句なり

しこの咲きたる如くといふにや、なでしこの花は殊に赤きものなる上に、又火桶には中古より瞿麥を畫きけるなれば、そのよせ有る事にて、二つ相兼ねて斯くは句作り有りしなるべしといへり、此説も又捨難し、いか様にも撫子は取合せものと見立一躰は火桶の句なればなり、又火桶に畫きし瞿麥を咲けるといひしにや、然らば冬の句とも思はれ侍るなり、諸集夏に出し置きたれば予も又改めず、後鑑を待つのみ○林藪餘談に、句解を難じて曰く、百庵謂ふに、此注は欠雷盆に蕃椒を栽ゑたる鄙俚の様笑ふべし○瞿麥異名石竹、なでしこ、とこなつ高漣が草花譜に、千辨なるを洛陽花と名づく、或説に、萬葉卷六に、四時美、と書けり、後撰十四に、源忠明朝臣、十月ばかりに常夏を折りて贈り侍りければ、冬なれど君が垣ほに咲きぬればむべ常夏に戀しかりけり、定家卿拾遺愚艸冬、霜さゆる朝の原の冬がれに一花咲ける大和撫子、按ずるに、蕉が句、咲ける火桶哉、とは續

かす、是蕉に限らず、徒言の點者の句此類計ふるに勝へ難し、若し添削せば、霜の後なでしこ咲きぬ桐火桶と有らば可ならん、古き連歌に「霞こめたる桐火桶哉」といふ句に「花やとき紅葉やすらん覺束な」ともあり○按ずるに、説叢に諸集夏に出し置くと、いづれの集にや、勸進帳小文庫泊船集共に冬の部に出でたり、いまだ夏の部に有る集を見ず、瞿麥の繪をいへるにや、人も見ぬ春や鏡のうらの梅と鏡の裏に梅の花の形鏤付けたるを見ての吟有りし事もあり、又百庵がてには直したる如くせば、誠に桐火桶に咲きたるならん、霜の後なでしこの咲けるは此火桶哉と爰に感ずる聞えあるなり。

住みつかぬ旅の心や置火燧

元祿四年の猿蓑集に見えたり○勸進帳に、一日曲水を訪ひ、役にも立たぬ事とも言ひあがりて、心細くなり行きしに、膳所の

泊船集には、霜の月と見えたり、前書は同じ、竹の間はけふる紅葉のかす散りて霜に花咲く
園の埋火
烏丸光廣卿の詠か

文として持て來れり、とくく披き見るに、いねくと人に言はれても尙ほ食ひあらず旅のやどり、どこやら寒き居心を侘びて「住みつかぬ旅の心や置火燧」まだ埋火の消えやらず、臘月の末京都を退出で、乙州が新宅に春を待ちて、人に家を買はせて我は年忘れ三日口を閉ぢて題正月四日、大津繪の筆のはじめや何佛金平が分別の如く今年は休みに致し候而歳旦思ひよらず候へば如此御座候 正月五日 曲水様 はせを、と見えたり○枯尾花の序に此句有り、曰く、是は慈鎮和尚の「旅の世に又旅寝して草枕夢の中にも夢を見る哉」と詠ませ給ひしに思ひ合せて侍るなり○西雲集に、旅心に置火燧とは乙州が爲に述べ聞え給ひけん、卯の花に火桶置くらん雪の暮 嵐雪と見えたり○粟津が原に曰く、其角廿年已前作最中の頃、寝ごゝろや火燧ふとんのさめぬうち、是は一曲有りながら俗情の句なれば、貴人へ打まかせては耻辱なり、されども自讃にや、蕉翁旅

粟津が原集寶永七年桃
園選

五文字かはり有り

列子仲尼第四に、處_二吾之家_一如_二逆旅_一。夫木には、住みつき難きものにぞありけるとあり

芭蕉句選年考

四〇四

行の先へ文章す、返翰に句「落ちつかぬ旅の心や置火燧」是又旅體火燧の情自然と優美なりけり。○師走袋に、これ置火燧にかたどりて旅の心を云へり、住つかぬ、炭繼がぬといふは誤なり、いまだとくと居くろまぬ置火燧の心やと云へる句なり。○説叢に、師走袋を難じて、旅中の吟ならんには此註あたれり、居くろまぬを置火燧の心に云はんよりは、尻据らぬ旅寢の身こそ置火燧の様にてあれと、一所不住の觀想の句とせん方まさるべきにや、また置火燧は此處彼處へ移し易ければ、旅の尻落ちつかぬに似たりとも聞ゆ、旅中の詞書も見えねば置火燧の句とや云はん。○案するに、旅中にての吟なる事勸進帳の詞書にて見るべし。旅の身の火燧に似たるも、火燧の旅の身に似たるも朝三暮四か。○或曰、六百番歌合、九番左寄、傀儡戀、うかれ女のうかれてありく旅やかた住みつき難き戀もする哉、是を取れるや。

發句集貞享元年とす

按するに二字切といひ三字切といふ是等にて切字の名目の事察すべし

面白し雪にやならん冬の雨

貞享四年の吟なるべし。笈日記尾張の部に「ためつけて雪見にまかる紙子哉」面白し雪にやならん冬の雨同じ頃ならん杜國亭にて中あしき人の事取りつくろひて「雪と雪こよひ師走の名月か」其年熱田の御造營ありしを、とき直す鏡も清し雪の花。○按するに、研直すの句笈の小文に貞享四年の冬に見えたり。よつて笈日記の表を見合せ、貞享四年の句なるべしとす。○古今抄に、二字切「秋涼し手毎にむけや瓜茄子」おもしろし雪にやならん冬の雨。右二章は二字切ながら現在のしの字は輕き故に耶とも疑ひ、哉とも定む、此類は強ひて論なければ本式にいはる證句をもて二字三字の別用を知るべきなり。○宇陀法師に、三字切「面白し雪にやならん冬の雨」子供等よ盡顔咲きぬ瓜むかん。○或人所持の文に、はやく是へ御出可給候盡時には京

芭蕉句選年考

四〇五

よりも客見え可申候其前に拵へ置申度候酒肴少し斗貴様御
調置頼入候面白し雪にやならん今日の雨」十七 喜八との
はせを。

雁さわぐ鳥羽の田面の寒の雨

何れの年の吟にや未知西華集には鳥羽の田つらやと有りて、
此句は武江に有りし冬ならん寒の雨といふ名の珍しければ
各發句案じたるに寒の字の働き此句に及び難し〇三體詩に、
宋の許渾が洛陽城詩に禾黍離々半野蒿昔人城此豈知勞水聲
東去市朝變山勢北來宮殿高鴉噪暮雲歸故堞雁迷寒雨下空濛
可憐嶺嶺登仙子猶自吹笙醉碧桃〇新古今集雜下あし鴨のさ
わぐ入江の水の江の世にすみ難き我身なりけり 人丸。

月花の愚に針たてん寒の入

何れの年の吟にや未知小文庫に見えたり〇酌塞にも有り〇
泊船集に題しらすと有り〇笈の小文に百骸九竅の中に物あ
り假に名付けて風羅坊といふ誠にうすものゝ風に破れ易か
らん事をいふにやあらん彼れ狂句を好む事久し終に生涯の
はかりごととなす或時は倦て放擲せん事を思ひ或時は進ん
で人に勝たん事をほこり是非胸中にたゝかうて是が爲に身
安からずしばらく身を立てん事を願へども是が爲にさへら
れしばらく學んで愚を曉らん事を思へども是が爲に破れ終
に無能無藝にして只此一筋に繋がる下略〇古文後集に張子
厚西銘曰横渠先生銘其書室之兩牖東曰忘愚西曰訂頑

から鮭も空也の瘦も寒の中

元祿四年の猿蓑集に見えたり〇古今抄に二段切夕にも朝に
もつかす瓜の花」虚鮭も空也の瘦も寒の中」されば此二句の意

河南府有洛陽故城、樂
は城の上の垣なり、濠
は城下の池なり、又云
樂は城上の女牆也、濠
は水の名

老子の事

字彙、病、夜、以石鍼刺

釋林類聚に

枯木倚寒巖 三冬無暖氣

といふは、水無月の暑き日にも瓜の花のみ露けくて、夕顔にもあらず朝顔にもあらずとは、慥に二段の差別なるに、つかずとは辭の双關にして爰に句法をも稱すべし、次に空也とから鮭は枯木寒巖の觀想ながら、空鮭には寒中の藥食を寄せ、空也には寒夜の修行を結べる、寒中の二字は更にして、瘦の一字には互照の格を稱すべし、されば互見の法に似たれど、影略に聊のたがひあり、爰に文法句格をも知るべし、されど是等の再撰は故翁の余意を汲みながら、論せば師徳を滅するに似たらん、恐れても尙恐るべき沙汰なり○元享釋書に、釋光勝不言姓氏爲沙彌、時自稱空也、人又不諱言空也、少好佚遊、天下殆遍、所過塗多爲利濟、荷鋤、鍤、嶮、拾、石、鋪、濕、架、破、橋、修、廢、寺、無水之地多穿井、井必甘冷、以其常唱彌陀、號俗名彌陀井、往々而在焉、荒原曠野每逢遺骸、摺聚一處、念彌陀名、灌油而燒、過弱冠於尾州國分寺、薙髮爲沙彌、天慶元年入王城、於市鄭唱彌陀、勸化人、呼爲市上人、天曆

按ずるに、空也像六波羅密寺と光勝寺にあり

二年四月上天臺山、從座主延昌得度、五年京畿疫、死屍相枕也、憐之、自刻十一面大悲像、祈之、像成、疫止、其長一丈、於洛東勸四衆、創一藍、號六波羅密寺、奉安像焉也○師走俗に、是寒中の氣色をいへる句なり、陰寒のはげしき時節なり、空也の忌日霜月十三日なれば、其頃瘦もから鮭の如しとなり○三草紙に、師の曰く、心の味をいひ取らんと數日腸を絞るとなり、骨折りたる句と見え侍るなり○按ずるに、吐綬雜集に、辻堂に空也の像の魚を持ちたる體を繪がきて、暮秋、空也の像冬のけしきとなり、にけり、洛の秋風が句あり、若し此像によれる歟。

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき

元祿三年の俳番匠に、鉢たゝき聞きにとて翁の宿り申されしに鉢たゝき參らざりければ、箝こせ眞似ても見せん鉢たゝき去來朗けて參りたれば、とありて、此句、墓もめぐるか、と見え

抑空也上人は延喜帝第二の皇子なりしが、塵外の無爲を樂しむの志願ましく、ければ遂に出家し給ひ玉櫃金殿を立

出で北山鞍馬の奥に蕭然として山居し給ふ、麋鹿夜々來りて閑坐を慰めける、上人是を憐れみ其聲を愛し給ふ事深し、一日鹿來らず、然るに平定盛といふもの遊獵して鹿を持來り此山に於て討取りし由をいふ、上人大に愁傷し其鹿を得て皮を裘とし角を杖の頭に挟んで常に携へ給ふ獵者定盛も上人の法徳に歸入し御弟子となり教化に任せ妻子を具し頭は有髮の俗體にして衣を着し瓢をたいて上人御作の和讃を誦うて、寒中には夜々五三味市中を徘徊し淨土往生の因を勤むるなり

右都圖會にあり、按ずるに延喜帝の皇子といふ事隱逸傳にも見えたり

たり、次に「その古き瓢箪見せよ鉢たゝき 去來」○句解に、嗟峨落柿舎にて、と前書ありて、此句、塚と出でたり、長嘯は木下若狹守勝俊と號す、金吾中納言秀秋卿の舎兄なり、後に世を厭ひて洛東靈山に隠れて和歌を詠す、慶安のはじめ卒し給ふ、其詠を集めて舉白集とす、小鹽山の麓に墳あり○梅花林藪に、百庵謂に、此鉢敲之事歌連に未だ詠せずと雖、長嘯子の詠あれば亦一興たり、芭蕉が趣向可なり、然りと雖此吟、嘯翁の塚を回るや、と句作すべし、此類俳諧の僻なり○舉白集に、鉢たゝきいつよりありとも知らぬ古き瓢の器持佛の具に得たり、おのづから茶湯の水さしに宜し、はた花を生け果物を盛る、一物三用に足る、蓋の裏には異様なる人がたあり、空也の遺弟とかいふなる、よりて此物を鉢たゝきと名づく、いつも冬になれば寒き霜夜の明方、何事にかあらん高く響りて大路を過ぐる彼が聲いと耐へ難く、目さめて不圖聞付けたるは卯の花のかげもかくるゝ

心地す、鉢たゝき曉方の一聲は冬の夜さへも鳴く郭公○案ずるに、梅花林藪にいふ所歌連歌に詠せずと雖、長嘯の詠あれば芭蕉の趣向可なりといふにや、芭蕉其の詠格を以てするに非ず、鉢たゝきの事長嘯の歌ある故に、其文書きたる長嘯の墓をもめぐるかと思ひたるは、鉢たゝきに限らず、念佛の行者は七墓をめぐるなどいふ事も侍れば、此鉢たゝき長嘯の墓もめぐるかと思ひたる句なり、是俳番匠に見えたる通り宵の程待ちたるに來らずして、夜明けて來りける故に、昨夜長嘯の墓もめぐりたるかと思ふ意の句なり、然るを百庵がいふ如く、嘯翁の塚もめぐるかとする時は、則ち廻る所を見たる聞え有り、時宜調はず、又斯く云は、此や疑ひなりといはんすれど、其論も有る事なり、去來抄に、笠提げて墓をめぐるやはつ時雨 北枝、先師の墓に詣で、の句なり、許六が曰く、是は脇よりいふ句なり、自分何の疑ひ有りてや、とは云はん、去來曰、やは治定嘆息のや

なり、常に人を訪ふには、笠提げて門戸をこそ入れ、是は思ひの外に墓をめぐる事哉やと云へる事なり、凡そ發句は一句を以て聞くべし、笠提げて門に這入るやと云は、疑なき外人の句なりと見えたり、是式の事百庵知らざるにはあらず、芭蕉の吟一句の上にては何故塚も廻るかと疑ひ咎めたるといふせんも無ければ、塚ももし廻るやと一句の聞え美しくとの事なるべし、それは俳番匠に心をとめて見ざるの念ならん、去來が門口に鉢たゝきの來る時に、すぐさま思ひ寄りたる儘に言出せる句なればもとしかと疑ひ尋ねたる句時宜相應なり、しかも其時去來も其古き瓢箪見せよと鉢たゝきに對しての句あり、又百庵五文字を嘯翁と直したるを察するに、長嘯は木下若狭守なり、長嘯とのみ云はんは不敬なりとにや、それ等を咎めんには芭蕉の句數々あり、義朝の心に似たり秋の風、西行の草鞋もかゝれ松の露、義仲の寢覺の山か月悲し、是等も不敬を咎

めて公とも上人ともせよと云はんは公務の沙汰にして、風騷を樂しむにはあらず○説叢に、句意は、汝が世にもてはやされ淋しがらるゝ事もまたく長嘯の言葉にはじまりてなれば、何を置きても夜毎にこの墓をば訪ひめぐれよと諫めたるなり、めぐらさばなるまいぞとなり、唯空然としたる五文字には有るべからず、其の故は小鹽山のほとりは更にして、鉢扣の夜毎に廻る道にも其の程々にいかばかりも古人風騷の古墳は有るべきを、夫れをばいはず、長嘯に限りたる所を心得べきものなり、祖師の空也に繼ぎては長嘯の墓を龜末にすなとの義なり。

納豆切る音しばし待て鉢たゝき

何れの年の吟にや未だ知らず、泊船集に有り○酌塞にも見えたり。

節季候を雀の笑ふ出立かな

元祿五年の深川集に、忘年之書懷、素堂亭、節季候、節季候を雀の笑ふ出立哉。はせを餅春、餅つきやあがりかねたる鶏の泊屋とや嵐蘭衣配、文箱の先づ模様見る衣くばり。曾良佛名、佛名や、儂頭は香の薄けふり。洒堂歳暮、腹中の反古見分けん年の暮。素堂餘興、年忘れ盃に桃の花書かん。洒堂、膝にのせたる琵琶のこがらし。素堂、背の月よく寝る客に宿かして。芭蕉とあり。

節季候の來ては風雅も師走哉

元祿四年の勸進帳に、果の朔日の朝から、と前書ありて、節季候の來れば、と有り。○後馳集にも、來れば、と有り。○赤草紙に、此句風雅も師走哉と俗とひとつに云侍る、是先師の心ばへなり、人

の句に、藏焼けて、と云ふ句あり、飛ぶ蝶の羽音やかまし、といふ句あり、高いひて甚だ心俗なり、味ふべし。

煤掃や暮れ行く宿の高軒

何れの年の吟にや未知、泊船集に此句あり。○小文庫に、煤掃の説、明ぼの、空より物のはたく、と聞ゆるは、盃をたく音なるべし、げふは師走の十三日煤掃のことぶきなり、實にや雲井の儀式九重の町の作法は嘉例ある事にして、たゝなみくの人の煤掃く體こそいと面白けれ、各門さしこめて奥の一間を屏風に圍ひなし、火鉢に茶釜をかけて、姫が帷子の上張爪さきの見えたる足袋もいと寒く冬の日影の早く晝になり行き、庭の隅調度ども取散らしたる中に、持佛のうしろ向きたるぞ目には立ちけれ、家の童の緑の破れ簀子の下を覗きまはるは何を拾ふにやとあやし、味噌と呼ぶる大男の袋かぶり、簀着たる

もめづらかに、米櫃のさんうちつけ狙しらけ行燈はりかへて
田作り崎淺漬のかをり花やかに、上下の膳据ゑ並べたるに、程
なく暮れて高軒とはなりぬ、と有りて此句見えたり。

煤掃は杉の一木のあらし哉

元祿五年己が光に、旅行と前書ありて「煤掃は杉の木の間の嵐
哉」と見えたり○泊船集は己が光と同じ、句選いづれによりた
るや。

煤掃は己が棚つる大工かな

元祿七年の炭俵集に見えたり○泊船集にもあり。

旅寝して見しやうき世の煤拂

貞享四年の吟なり、笈の小文に、師走十日あまり名護屋を出で

、舊里に入らんとす、と言葉書有りて、此句見えたり○曠野集
旅の部に有り○宇陀法師には、旅をして、と見えたり○本朝文
鑑に、庚午紀行として笈の小文と大同小異の文あり、それには
いらこ崎といふ所に杜國が幽栖をとふらひて、今年も美濃尾
張の間に暮れなんとす、と有りて此の二句見えたり。

對門人ノ僧

これや世の煤にそまらぬ古格子

元祿四年の勸進帳に、路通が詞書に曰く、筑紫の方にまかりし
頃頭陀に入れし五器一具難波津の旅亭に捨てしを破らす、七
とせの後湖上の粟津まで送りければ是をさへ過ぎし方を思
ひ出してあはれなりしまゝに、翁に此事物語りて侍りければ、
とありて、此句、古合子と見えたり○小文庫に句選の如くに前
書有りて、句は古合子と見えたり○宇陀法師に、古格子と有り、

是誤なるべし○泊船集に、前書句選の如くありて、句も古格子と見えたり、されば句選は泊船集にならひたるなるべし○評林に、寂蓮法師「これや世の浮世の外、春ならん花の扉の曙の空、蓮華初開樂の心にや、此歌のこれに基くにはあらねど、何となく似寄りたる風情なれば、只よせて一句一首の格と思ふべしや、煤はわけて曙のけしき何と無く、とありて、泊船集の如く、格子とあり、格子合子のたがひ、評もたがひ侍らんか○説叢に曰く、此解に不審三ヶ條あり、第一、古格子、古合子、兩様の内、句解に古格子は誤りなりといへり、然れども古き集にも古格子と書出だす、句選又同じ、史邦が小文庫には、古合子と有り是れ香合子と逸へ解にのみ誤れるやうに記せしは心得難し、袖日記もとり吏登が覺書にして、古嵐雪の書にはあらざる事、先年予も聞置きしなり、又此書に有ても、いづれの書に斯く有りとも出所たしかならず、又翁の眞墨の書通に有る事も見え、何を證と

して盒子に極めんや、又路通七年の後、湖南に送ると、翁と別れて後七年にや、年號月日も無くていづれの頃といふ事も知れず、又翁の前書ならましかば、湖南などは書かれまじ、たやすく書かれぬべき事なり、疑ふらくは好事の者、盒子に附會せん爲にこしらへたる前書と覺ゆ、信用し難し、第二に對門人僧と前書ある上に、又や路通が七年の詞書あるべきやうなし、二重にして心も相違せるなり、又對門人僧の題書はさし向ひ逢ひ居たる事なり、然れば路通にもせよ、今對して居られし時の即吟と見ゆ、さすれば又旅亭に送るを見る、といふ文段始末わからぬものか、第三に、僧となれば格子は似合はず、定めてこれは盒子ならめと、推量の沙汰より斯く盒子にせしにや、然れども對門人僧の四字より見れば、格子の方こそ據有りとせん、僧なりとて格子作り無きにしもあらず、市中の假住居なればならし、此説も又偏屈なり、盒子の事は季世末書の説にして、其出所

たしかならねば、まして七十餘年以前の事、其正義は誰々も知り難し、古格子とは諸書に古人達の書置きしかば、予が方には此に従ふものにて、此句全く古格子なるべし、いかにとなれば是は門葉の僧に對して挨拶の句と見えたり、世は様々に食り稼ぎて高ぶりおごりて、門戸美々しく構へ居る中に、此住居や流石にやさしく淋しく世の煤や塵にも染まらず、風流に古びたる格子なりと、其人になぞらへて稱美したる即興と見ゆ、此の如くにて對門人僧の四字もよく取れて句も聞え、意味もありつれ、それを路通が送れる、椀を見たとて、煤によごれぬ古格子なりと吟じて何の詮あらんや、此の如きは句とはいひ難し、されや一句に兩様の詞書と題書と二度有るまじき筈なり、然れば評林に扉の歌を似よりたるとの事は屢趣を得たる所あるが、萬一盒子に決する正しき事跡あらば追て改むべし、正證無きうちは古格子と覺ゆべし、題書の四字によく移りたれ

ばなり、又此句季と見る所は煤掃の頃なるべし、然らば格子いよく據あり、唯に煤垂れたる古椀としては、いづれの所か季とせん、冬とも定め難からん、器の古く煤けたるは古道具屋にも常に有りて季とは定め難し、全く冬季の煤ならんには古格子いよく然り、世の煤と續けたる、煤掃の外無かるべし、路通が事頭陀物語涼帝選に委しく記しぬ、其等にも高麗椀の事有りしかども、文とは事かはれり、其等を無理に説を添へて置きしと見ゆ、ゆめく正しからぬ事なり、路通は後に龍慶橋大屋氏何某が方に寄宿して、そこにて享保の初め頃とかや病死す、傳書三四卷有りて寫し置きて予が家什とす、路考といへる路の字も路通より傳へし由なり、○按ずるに、説叢は宇陀法師によれるなるべし、勸進帳の前書にて一句も分り侍る、古合子は盒子の事と見る時は對の字をコタフと訓み侍らば如何に、

月白き師走は子路が寢覺かな

何れの年の吟にや未知。泊船集に見えたり。○句解に曰く、師走の月のすさましきを子路が心と云へるなるべし、又枕の草紙に、すさましきものに、師走の月とあり。○説叢に、師走袋句解を難じて曰く、兩書ともに師走の月といへば清女を引出すと雖所により姿にもよるべし、勇あればとて凄しきものにも非ず、清女のすさましきと云へるは冷の字の訓にして勇烈の様にはあらず、烈の字の意ならんには清女も左はいふまじき也、まして翁此句にいふべからず、公時樊噲とも作らるべし、是全く本意にはあらぬものか、篋之記に曰く、此四書なりといふ人有りい南麻の瘦園遺稿にも引十州冷物、師走月夜、同肩同蓼水、老女假粧、女川ひしかば爰にも用ふ醉法師、醉舞、無酒神樂、胡瓜、老勅使、破打囚競馬、崑崙、仙舞畫云々、是によりて見れば清女より前に此事ありて、清女又ひろくい

ふなり、南郭は、師走の月といふ所無き本も有る由、有る本は異本なるべし、と遺稿に記し置きぬ、考ふるに、此句は子路が義を守れる心の潔白にて、冷しき心にはあらず、既に揚升庵白の字の異訓を擧ぐるに、日光の白きを皜と云、月光の白きを皎と云、と有り、此月白きは皎なり、皎月とも云なり、扱は子路が衛に亂ありと聞きて馳せつき、戦ふに、槍にて冠の緒を切られしに、君子は死すれども冠をはなさずとて、其緒を結び居るうちに、終に突殺されしなり、斯る義者の心、師走の月の研えわたりたるに等しきとなり、翁昔何れの頃にか有りけん、義を守る事は蕃椒の如くせよと申されしこの語、それ等の頃にや、ふと思ひ合せての吟ならんも知るべからず、然れば子路は喩の俤にして、我は貧なれども其心潔白を守り、買かゝりもせず、借銭も無く、義を守る事、蕃椒の如く心がければ、萬事手見きんなる程に、世に苦しむ師走とても、我隠れ家には月面白き寢覺ぞと、一重の

下に心を含めて風諭の句なるべし、若し又子路によれる事ありや、其代に翁の胸中は推量も届かず、斯く我清貧の生涯にかけて見んには、尙句意掌上の玉を看るが如くならむ、感歎風諭少なからず、後の見ん人思ふべし、再考するに、すべて句には重さを取るといふ事有り、かさを取らねば句位低し、此子路も一句のかさと知るべし、庵の寢覺としては一句輕ければ、子路と重みを付けたるならし、翁も此句には少しかさを付けて見せられしなり、心得べきか、子路が名に迷ふべからず。

かくれけり師走の海の鳩かいつふり

元祿五年の己が光に、住捨てし幻住庵には如何なる句をか残されけん、それはさて世の中を承るに、妖けながら狐食しき師走哉、其角「かくれけり師走の海のかいつふり」と見えたり、○按ずるに、幻住庵は湖水のほとり、石山なり、湖水は鳩の海とい

ふ、鳩はかいつふりなり、○師走俗に曰く、世の人の掛乞などにせがまれて、鳩の如くぬけかくるゝとの作なり、○案するに、世の人の事なるか覺束なし、其角が句にならべて見る時は、大津など年の暮には、交易にせはしければ、引籠り居る芭蕉自らの上を述べたるにや、元祿三年幻住庵にての吟歎。

何をこの師走の市に行く鳥

元祿三年の花摘集に、五文字、何にこの、と有り、○泊船集には、何をこの師走の市を、とあり、○赤草紙に、此句、師の曰く、五文字のいきごみに有りとなり、○桃鏡選の芭蕉翁文集に書簡あり、其文に、いかにしてか便も無御座候若哉、渡海の舟や打われけん、病變やふりわきけん、杯方寸を碎くのみ候されども、名古屋の文に御無事旨推量に見え申候拙者も、霜月末には、南都祭禮見物して膳所へ出越年歳、且京近き心、菰を着て誰人います花

花摘は其角選

の春「初時雨猿も小護をほしげなり」山中の子供と遊ぶ「はつ雪に兎の皮の髭つくれ」南都「雪悲しいつ大佛の瓦ふき」京にて鉢たゞきを聞きて「長嘯の暮も廻るか鉢たゞき」歳暮「何にこの師走の市に行く鳥急便早々に候」正二月の間伊賀へ御越し待存候宗七も御噂申斗に候 正月十七日 菫菊丸様 はせを○案するに、貞享元年の吟歎。

年の市線香買ひに出でばやな

貞享四年の續虛栗集に見えたり○山家集に、東山にて人々年の暮に思を逃べけるに「年暮れし其いとなみは忘られてあらぬ様なるいそぎをぞする」○西行物語に、去年までは何となく公私につけて有りし事ども思ひ出で、年暮れしその營みはさもあらで、と上の句見えたり○或行脚の僧曰く、幻住庵にての吟なりと○按するに、芭蕉幻住庵に住みしは元祿三四の頃

なり、猿蓑に其記あり、曰く、幻住庵といふ、あるじの僧何某は勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八とせばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ残せり、予市中を去る事十年ばかりにして、五十年や、近き身、下略。

有明も三十日に近し餅の音

元祿六年の吟也、同七年選の行狀記に、路通が曰く、今は夢、師去年の歳暮に「月しろや三十日に近き餅の音」今年限りなるべき教へなるべし、兼好法師身まかりぬべき前の月二十八日の夜の夢に「ありとだに人に知られぬ身の程やみそかに近き有明の月」と侍りしとかや、兼好も終りを伊賀の國に取りて侍ると傳へしに、此人や再び世に生れて末の風雅を起しけんといと慕はるゝ、又古へより辭世を残す事誰々も有る事なれば、翁も残し給ふべけれど、平生則辭世なり、何事を此節にあらんや

孟浩然、歲暮歸南山時、略す

種生傳ならびの岡と
兼好の一代記なり

とて、臨終の時一句無し、兼好法師も斯る事侍りしとかや、夫を思ひ合せければ、年の暮の句いと身にしみて尊くぞ侍る。○笈日記の終に、此句有明もみそかに近し餅の音兼好法師が歌に「ありとだに人に知られぬ身の程やみそかに近き有明の月」と見えたり。○種生傳に、兼好法師は觀應元年二月十五日伊賀國國見山の麓田井の莊の庵にて世を去り侍る、于時六十九歳「ありとだに人に知られぬ身の程やみそかに近き曙の月」是其年正月廿八日の詠なる由見えたり、又ならびの岡にも、其年月日ともに同じくして、歌は、有明の月、と見えたり。○説叢に、兼好の歌を翁も此みそかに近き有明を殊に好もしがられしとかや、人に知られぬ身の程のたとへのみにもあらず、其臨終の近よれる除情をも見るべきにや、此句は當季に裁入れたるのみなり、又餅春といふは平生にもあれど、晦日に近しといふ詞の裁入れ續にて、一しほに年の終の季と見るべし、宗瑞云、案ずる

に、餅に季をもたせたるのみにもあらず、月毎に晦日はあれど年の終の物悲しく有明近く餅の音聞えたる世のいそがしきを閑居に聞き居たる様ならん。

乙州が新宅にて

人に家を買はせて我は年忘

元祿四年の猿蓑集に前書ともに斯く有り。○勸進帳に、一日曲水を訪ひ、やくにも立たぬ事ども云ひあがりて、心細くなり行きしに、膳所の文とて来て來れり、とりく開き見るに、と有りて、芭蕉より曲水への書翰有り、其文に云、いねくと人に云はれても猶喰あらず旅の舍り何處やら寒き居心を佗びて、住みつかぬ旅の心や置火燧まだ埋火の消えやらず臘月末京都を退き乙州が宅に春を待ちて、人に家を買はせて我は年忘れ、三日口を閉ぢて題正月四日、大津繪の筆のはじめは何佛、金平が

勸進帳は元祿四年路通
選

分別の如く今年は休みに致し候而歳旦思ひよらず候得ば如
 此御座候正月五日 曲水様 はせを」と有り○二十五條に「我は
 家を人に買はせて年忘れ」と見えて、挨拶切といふ一句に自他
 の差別ある故なり、と有り○古今抄に、挨拶切に、人に家を買は
 せて我は、と有りて、此切は全く新製なり、其意いかんとなれば
 句情に自他の挨拶ありて、是をそれとも、それにこれはとも物
 に對する差別より挨拶をもて此名とはなせり、下略○杜律に、
 杜位宅守歳と題ありて、守歳阿戎家椒盤已、頌花○古今集雜に、
 家を賣りてよめる、伊勢、あすか川淵にもあらぬ我宿も瀬にか
 はり行くものにぞ有りける○師走袋に、詞書に、乙州が新宅に
 て、と有り、人は世のならばしにつれて家など買ひとゝのへて
 心に苦しむ事もあるに、我はそれ等の事何とも思はず、其家に
 て年を忘るゝとなり、是も浮世に一塵もといめぬとの句なり。

此詩は杜甫四十にして
 官未_レ完放_二浪醉鄉_一
 元祿三年の秋津島集に
 人の家をわが家にして
 秋の暮 曲 水

せつかれて年忘れする機嫌哉

いづれの年の吟にや未知小文庫に見えたり。

此わすれ流るゝ年の淀ならん

元祿五年の葛の松原に「此わすれ流るゝ年の淀ならん」名月や
 池をめぐりて夜もすがら必とする事なきは素堂亭の年わす
 れにして、固とせざるは芭蕉庵の月見なるべし、と見えたり○
 鴨長明方丈記に行水の流れば絶えずしてしかももとの水に
 あらずと云々。

みづから雨の侘笠をはりて

世の中はさらに宗祇のやどり哉

天和三年の虚栗冬の部に、手づから雨のわび笠をはりて世を

句選頭番に、異に世にふるも有り杉風所持の短冊によの中とあり、和漢文操注に竹取翁の事萬葉に長歌に有り、つれ／＼草に妙観が刀はいたく切れず按ずるに萬葉卷の十六に竹取翁の歌并に短歌有り、文操注に撰集抄にもいすしりゆがみ坊まがれるなりに往生すと云へる其詞を互照して、次に西行を出だすべき断續の筆法あり、東坡が笠戴きたる雪中の圖和漢に多し、

ふるもと有り○和漢文操に澁笠銘并序、草の扉に獨りわびて秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙観が刀をかり、竹をわり竹を削りて、笠づくりの翁と名乗る、心静ならざれば日を経るにもものうく、工拙なれば、夜を盡して成らず、あしたに紙を重ね、夕におして又重ね／＼、澁といふものをもて色をさはし、益堅からん事を思ふ、廿日過ぐる程にこそ稍出来にけれ、其形表の方にまき入り、外さまに吹きかへり、荷葉の半開くるに似てなかく／＼をかき姿なり、さらばすみかねのいみじからんよりゆがみながらに愛しつべし、西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か、宮城野の露に供つねば、吳天の雪に杖をやひかん、飯にさそひ時雨に傾けてそいろにめで殊に興ず、興のうちにして俄に感ずる事あり、再び宗祇の時雨ならでも、假の宿りに袂をうるほして、自ら笠のうらに書付け侍る世にふるは更に宗祇のやどり哉○評林に、是は宗祇法師の句に「世

朗詠集に、笠重吳天雪、杳杳楚地花、芳野拾遺に、後村上帝、吉野假宮にて、世にふるはさらに時雨のやどり哉、と御發句有りしと見えたり

にふるは更に時雨のやどり哉 宗祇愚考するに、笈日記には、世の中、と有り、是誤なるべし、新古今、二條院讃岐世にふるは苦しきものをまきのやに安くもすぐる村時雨哉是より宗祇の發句も出でたるべし、然らば五文字、世にふる、なるべしや、わけて觀念の歌なり、主旨法印の御説に、まきのやとは結構なる家なり、されど其結構なる家にも時雨の降りかゝる事はのがれ難しとなり、わが世ふるはいろ／＼とむづかしき事にて一生をおくるなり、時雨は何となくやす／＼と如何なるはにふの板屋もかまひなく降れば、渡り易しとなり、猶考ふべし、江口の里にて西行法師のかりの宿りの歌あり、世にふるめかしく、殘す武の深川長慶寺に、芭蕉門人杉風が此短冊を納めて石碑を建て、短冊塚と名づく、左右に其角嵐雪の兩俳仙を補佐として、三つの石碑とし、毎年十月十二日には好士の發句などを手向けて世々俳恩の志有り、是門人杉風が花鳥の風流なり○師走

俗に世にふるは世を経るとなり、雨のふるに經るをかねたり、世をふるは殊更宗祇が心にこそ時雨は面白けれとなり○説叢に評林を難じて曰く、讃岐の歌より宗祇の句出で、芭蕉又此句に轉じたる事よろしくは覺えぬ、但五文字の事、笈日記には支考が選にして誤るべきにあらず、雅言のぬめりを疑ひ且つは宗祇の涎に汚れしとて、世の中は、と替へて置かれしを、支考其儘に書出せしと見えたり、又世の中、世にふる、どちらも同じ心か、雨の縁語に、ふる、とは宗祇の連歌なり、世の中は時雨とは俳諧の利口なり、連袂のわかれ目をも知らず、讃岐の歌のみを證とせんは俳諧には違へりといふべきか、まして杉風所持の短冊に、翁の自筆にて、世の中、と有る上は何の誤りあらんや○案するに、同じ支考撰ながら元祿八年の笈日記には、世の中、とありて、享保十二年の和漢文操には、世にふる、と有るにて思ふべきか。

麥はへてよき隱家や畠むら

貞享四年の吟にや、笈日記尾張の部に、前書逢杜國、と有りて、さればこそあれたき儘の霜の宿此句に並べて有り、此句も杜國が宿るや、貞享四年いらこ崎に杜國を尋ねて、鷹ひとつ見付けてうれしいらこ崎の吟笈の小文に見えたり○案するに、元祿四年杜國が不幸の吟に「夢よりもうつゝの鷹ぞたのもしき」の吟有り、元祿五年の葛の松原に、杜國が忌日の事あり、もし又元祿二年伊勢の遷宮より尾張にも遊杖ありての吟にやとも見ゆれども、元祿二年のあら野集に「さればこそ荒れたきまゝの霜の宿」の句あり、是と同時の吟ならんには貞享四年か。

小町畫讚

たふとさや雪降らぬ日も蓑と笠

元祿五年の己が光に、前書斯く有りて、此句、貴さや、と有り○本朝文鑑に、卒都婆小町讚、あなたふとく、蓑もたふとし、笠もたふとし、いづれの人か語り傳へ、如何なる人か寫しといめて千載のまぼろし今こゝに覗はす、その形或時は魂も又こゝにあらん、蓑もたふとし、笠も尊し、たふとさや雪降らぬ日も蓑と笠と見えたり。

熱田御造營

とき直す鏡も清し雪の玉

貞享四年の吟なり。笈の小文に、熱田御修復、磨直す鏡も清し雪の花○笈日肥尾張の部に、熱田の御造營ありしを、と有りて、此句、雪の花、とあり○熱田三歌仙にも、雪の花、とありて、石しく庭の寒きあかつき」と桐葉が協有り○案するに、句選、雪の玉、とあるは花の字の書損にや、又こゝに此年の吟ある事は、是より先

圓機活法、雪花六出

後旅集は元祿八年如行
獨

句選詞書落字なるべし

貞享元年の冬野さらし紀行に、熱田に詣す、社頭大に破れ、築地は倒れて草村に隠る、かしこに繩を張りて小社の跡をしるし、爰に石を据ゑて其の神と名乗る、よもぎ慈心の儘に生ひたるがなか／＼にめでたきよりも心とゞまりける、しのぶさへ枯れて餅かふ宿り哉」と見えたり○後旅集に「研直す鏡も清し雪の花」と法樂有り、今に耳の底に残りて有難し。

こゝに草鞋を解きかしこに杖を

旅寝ながらに年も暮れければ

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら

貞享元年の野さらし紀行に、爰に草鞋を解きかしこに杖を捨て、旅寝ながらに年の暮れければ、と有りて此句見えたり○山家集に、陸奥の國にて年の暮に詠める、常よりも心細くぞ思ほゆる旅の空にて年の暮れぬる○素堂の序に、笠着て草履は

きながらの歳暮の如き、是なん皆人うき世の旅なる事を知り顔にして知らざるを諷したるにや○撰集抄に、額にはすいゝるに老の浪を重ね、眉には霜の積れるをもわきまへずして、はかなき嬰兒の父母に貧する如くにして、空しく走せ過ぐ、來世の苦しみを思へば佛語にはあらずや、知り顔にして知らざるは生死無常に侍るぞかし。

乞てくらひ貰うて食ひさすがに

年の暮れければ

めでたき人の數にも入らん老の暮

先手後手集は一代目宗瑞選

貞享三年の吟なるべし、眞蹟集に、貞享丁卯秋、と有り○先手後手集に、芭蕉眞蹟寫に、自得箴、もらうて食らひ乞うて食らひ肌寒わづかにのがれて、とありて、此句見えたり○説叢に、貰うて食らひ乞うて食らひ、やをら餓ゑも死なす、歳の暮れければ、め

此眞蹟杉風家藏石瀬に寫しあり

でたき人の數にも入らん老の暮、此句の詞書句選には、乞てくらひもらふてくらひさすがにとしの暮れれば、と記す、今眞墨の一軸を以て正す、都て後世の前書などに違ひて、句意わからざるあるなど、皆是等に併せ知るべし○按ずるに、句選先手後手説叢に、少しづゝのたがひあれど意同じきか、句を解するの害とも聞えず。

ふる里や隣に泣ぐ年の暮

桃鏡撰

貞享四年十月武江を立て伊賀の舊里に赴きし時の吟にして、笈の小文に見えたり○芭蕉翁文集に、代々のかしこき人々も古郷は忘れ難きものに覺え侍るよし、今ははじめの老も四十とせ過ぎて何事につけても昔のなつかしき儘にはらからの有様齡のかたむきて侍るも見捨て難く、初冬の空のうち時雨るゝ比より、雪を重ね霜を経て師走の末伊陽の山中に至る、尙

父母のいまそかりせば、と慈愛の昔も悲しく思ふ事のみあまた有り、と有りて此句見えたり。

盗人に逢うた夜もあり年の暮

元祿七年の續猿蓑に出でたり○有磯海集にも見えたり○師走俗に曰く、昔は世にありて財寶をも身に從へたるにより盗人に逢ひし事も有りつるに、今世捨人となりては盗まるゝ物も無ければ是ばかりも世を捨てたる楽しみなりとの除情見えたり。

分別の底たゞきけり年の暮

何れの年の吟にや未知、小文庫にあり○泊船集にも見えたり○翁草にもあり。

魚鳥の心は知らず年の暮

翁草集元祿八年里圃撰

浮世の北學元祿九年支考序可吟撰

何れの年の吟にや未知、小文庫には、としわすれ、とあり○泊船集に、としの暮と見えたり○浮世北集には、小文庫に同じく、としわすれ、と出でたり。

蛤の生ける甲斐あれ年の暮

何れの年の吟にや未知、小文庫には、かひ、と假名にて見えたり○東華集に秀句に似たる體とありて、かゝる、とあり○按ずるに、かひは甲斐、かゝるは貝なるべし○夫木集に、光俊、水ぶねにうきてひれふるいけ鯉の命まつ間もせはしなの世や○或人曰く、曾良が甥○○と云者所持の眞蹟、自畫讃に、楪の上に蛤二書きて此句有り。

曾良とは云はすソラウと云、小日向築土下武家に奉公す

月雪とのさばりけらし年の暮

貞享四年の續虛栗に見えたり○扁突に此句ありて、年の暮と

いふは一とせの暮行く上にかゝり、大年除夜はたゞ一晝夜の上にて大切なる日なり、よく工夫すべし。

山家に年を越えて

誰が婿ぞ齒朶に餅おふ年の暮

貞享二年の歳旦なり、野さらし紀行に、爰に草鞋をときかしこに杖を捨て、旅寝ながらに年の暮れければ、年暮れぬ笠着て草鞋はきながらといひしも、山家に年を越えて、誰が婿ぞ齒朶に餅おふうしの年とあり○一幅半には、餅に齒朶おふ丑の年と有り○按ずるに、在邊にて舅の方へ初春のことぶきは鏡餅を祝ひておくるなり、又貞享元年は子の年、よりて此吟有りけるか、此頃の風調か○赤草紙に、此句は丑の日の年の歳旦なり、此古體に人の知らぬ説ありとなり○案するに、丑の日にて有りけるか、丑の年にて閉ゆべきにや○一櫻の賦にも、山家に年

一櫻賦は貞享二年風濕

を越えて、と前書ありて、牛の年見えて、春の歳旦の句のはじめに有り○説叢に、杉風家什の一軸に、此句はじめにありて、次に「いく霜に心ほせをの松かざり」と有り、然れば誰が婿の句も歳旦と覺ゆ、句意は、正月に餅を配るの義にや、餅負ふを追ふに縁語をとりて、牛を追ふの心につらねたる舌風の體なり、尤是等は強ひていらふべからずの句なり、詞書に、年を越えて、と有りながら、句選に、としの暮として冬の部に入れしは前後相違なるものなり、又、鞭おふと出だす集もあり、もち、むち書きたがひにやと覺ゆ。

追加

わすれ草菜飯に摘まん年の暮

曾我物語は三河國白鷺撰なり

延寶七年五月の選の江戸の春集に出でたり○曾我物語にも見えたり○萬葉集第四卷大伴宿禰家持贈坂上大娘歌、萱草ツスレグサ吾下シモ紐爾ニヒル著有跡鬼乃志許ノシコ草事二思安利家理○奥儀抄に、わすれ草とは萱草をいふなり、兼名苑には忘憂草と書けり、これを見れば憂を忘るゝなり、おにのしこ草とは紫苑なり、是を見れば物忘れをせずといへり、順が和名抄には、おにのしこ草といふ注見えす、本草には忘れ草しのお草は同物と見えたり、伊勢物語にも然か侍り、又屋の軒に生ふる草をもしのお草とはいふなり○本艸綱目、萱草釋名忘憂、時珍曰、萱草作諼、諼忘也、詩云焉得諼草言樹之背、謂憂思不能自遣、故欲樹此草、玩味以忘憂也、集

解時珍曰、萱草下湿地、冬月叢生、葉如蒲、蒜葦而柔弱、新舊相代、四時青翠、五月抽莖開花○救荒本艸、萱艸花、和名わすれぐさ○和名抄、萱草一名忘憂、和須禮久佐、俗云如環藻二首、

しぐれ行くや船の舳繩に取りつきて

何年の吟にや未知柱曆集に、離別と前書有り○曾我物語にも見えたり。

杜國が不幸をいらこ崎に尋ねて

鷹の聲を折節聞きて

夢よりも現うつらの鷹ぞ頼もしき

元祿四年の吟なるべし、元祿四年の四月芭蕉落柿舎にありて嵯峨日記を書く、其詞に、廿八日夢に杜國が事を言出して涕泣して覺る、心氣相交はる時は夢を成す、陰盡きて火を夢み、陽衰

増益全九集と云醫書に見えたり

へて水を夢みる、飛鳥髪を含む時は飛鳥を夢み、帯を敷寝にする時は蛇を夢みると云へり、睡枕記に有て槐安園莊周夢蝶皆其の理ありて妙を盡さず、我夢は聖人君子の夢にあらず、終日妄想散亂の氣夜陰夢又然り、誠に其言葉を夢みるこそ所謂念夢なれ、我に志深く、伊陽菰里まで慕ひ來りて、夜は床を同じくし、起臥行脚の勞をも助けて、百日の程影の如く伴ふ、片時も離れず、或時は戯れ、或時は悲しみ、吾心裏に染みて忘るゝ事なければなるべし、覺めて又袂をしぼる、と見えたり○元祿五年の葛の松原に、杜國は志の男の子なるべし、阿叟も忌日覺え申されし、とあり○案するに、此先貞享四年の紀行笈の小文に、いらこ崎に杜國を尋ねて、應ひとつ見付けて嬉しいらこ崎の吟あり、同五年は改元ありて元祿元年なり、其秋東武に歸り、翌二年春より奥羽行脚して其秋伊勢に詣づ、又京大阪遊杖、同三年より四年の冬までにて、十月武の深川に歸庵なり、依之四年の句

なるべしとす○山家集に、ふたつ有りける鷹のいらこわたし
 すると申しけるが一の鷹はとままりて木の末にかゝりて待
 ると申しけるを聞きて、巢撼わたるいらこが崎を凝ひてなほ
 木にかゝる山歸哉。

米買ひに雪の袋や投頭巾

何れの年の吟にや未知、泊船集に、深川八貧文は今略之、と有り
 ○蒙求に、郡將候潜逢、其酒熟取頭上、葛巾漉酒畢、還復著之○粟
 津が原に、濟通が句の詞書に、雪の袋や投頭巾、と云ひしは芭蕉
 庵の成作なり○浮世の北に、此句の詞書に、昔深川にて米買ひ
 といへる題を置きて、と見えたり○師走袋に、題深川八貧、と有
 り、米買に行を雪といひかけて、袋を頭巾にかぶりたる體、其姿
 をまざくと見る如くに云課せられたり、一句奇絶々々○雪
 丸けに、深川八貧の内として、此句次に、新買雪の夜はとりわき

陶齋字淵明
 粟津ヶ原は寶永七年桃
 隣撰
 浮世の北、元祿九年支
 考撰

佐野のまさ買はん 依水酒買酒やよき雪ふみたてし門の前
 苔翠炭買炭一升雪にかざすや山折敷 泥芹茶買雪にかふ
 はやしことせよちやん帛 夕菊豆麩買手にすゑし豆麩を照
 らす雪の月 友五さしこもるむぐらの友か冬菜賣 芭蕉さ
 りとては寒きものなり枯薄 杉風さばけても愚とつく我も
 年暮れぬ 曾良と見えたり○案するに、此八貧の次に元祿二
 年の句有りすべては奥羽行脚の句にして、此冊子は曾良が反
 古の中より姪の周徳が集めたるものなり、然れば貞享四年冬
 は尾張伊賀に遊杖、翌五年は元祿元年にて、其秋東武に歸庵な
 り、是を見る時は貞享三年か元祿三年の吟ならんか、扱又師走
 帛には、袋を頭巾にしたる趣なれども、淵明が事もあれば頭巾
 を袋にしたるならんか○説叢に師走袋を難じて、行をゆきと
 いひかけなりとは古風の體にて入ほがなり、蕉門斯る甘みを
 好まず、去りながら一句成るの時自然と詞の續き縁語有りて

云かひも有るべし、是は雪の日の興に深川の芭蕉庵に八人寄
 合ひたるに、粥などせんいざ米買ひにと、紙の袋さげて出で行
 きながら、其袋を直にかふりたる、取あへぬ即興の姿のをかし
 みなり、投頭巾の姿能くく思ふべし、名人の句姿斯る所をこ
 そ學ぶべき事なり○按ずるに、説叢も師走帛と同じく、袋をか
 ふりたると見侍れば其方是ならんか、予は如何にしても紙袋
 を被りたらん姿よろしとも思はれ侍らず、をかしみとは其事
 にはあるまじくや。

雪の中に兎の皮の鬚つくれ

元祿三年のいつを昔に、山中子共とあそびて、と有りて、雪の日
 に、とわり○去來抄に、魯町曰此句心いかん、去來曰前書に子ど
 もと遊びてとあれば子共の業と思はるべし、強ひて理會すべ
 からず、機關を踏破つて知るべし、先師此句を語り給ふに予甚

萬葉十六に、獻新田部
 親王歌一首
 かつまたの池は我知る
 遊無ししかいふ君が跣
 のなきこと

つみ緒に兎の耳を引き
たてよ 其角

感動す、先師曰是を悦ばん者越人と汝のみならんと思ひしに
果して然りとて殊更の機嫌なりし、或曰雪は越後兎の縁に出
でたり、去來曰此説の古事神代の卷に出でたり、或曰兎の皮の
毳作るは雪中寒き故なり、去來曰斯の如く解せば暑き日に猿
若鬣をはづしけりの類なるべしいと淺まし○赤草紙には、初
雪に、と有りて此句、山中に子どもと遊びて、と前書あり、初雪の
興なり、ざれたる句は作者によるべし、先づは實體なり、尙有る
べし、と見えたり○師走袋に曰く、山中に子共の遊びて、と有り、
兎の裘を營むべしとの心か、追て考ふべし、又或人曰雪佛雪達
磨なんど作る序に越後兎の白き鬣作れと子共に下知したる
句にや侍らんか○説叢に曰く、先づ去來抄を證とすべし、鬣を
作りたるにも非ず、寒き雪の日に童の青涕たらしたるを見て
噓や寒からんに、兎の皮の鬣にても作りかけよかすと興じた
るのみなり、翁の風骨を味ふべし、袋草子に、五文字、雪の中に、と

記す、又句選にも此の如し、是二つながら遠へり、去來抄に、雪の
日に、と記す、是を證とすべき歟、此句なども強ひていらふべか
らず、古事記上卷大國主神苑に逢ひ給ひし事を稻羽之素苑也
と有り、文長き故略す、日本記には此事無し、神代卷といふはい
ぶかし○桃鏡撰の芭蕉翁文集に書簡有り、其文に、いかにして
か便も無御座候若や渡海の船や打われけん病變やふりわき
けん杯方寸を碎くのみに候されども名古屋の文に御無事旨
推量に見え申候拙者も霜月末南都祭禮見物して膳所へ出越
年歳且京ちかき心、菰を着て誰人います花の春、冬、初時雨猿も
小蓑をほしげなり、山中の子供と遊ぶ、初雪に兎の皮の鬣作れ
南都雪悲しいつ大佛の瓦ふき、京にて鉢扣を聞きて、長嘯の暮
も廻るか鉢たゞき歳暮、何に此師走の市に行く、鳥急便早々に
候正二月の間伊賀に御越待存候宗七も御噂申斗に候、正月
十七日、萬菊丸様、はせを○按するに貞享元年の吟か○神

代卷に曰く、素戔鳴尊春則重播種子且毀其畔秋則放天斑駒使
伏田中復天照大神當新嘗時則陰放辰於新宮又見天照大神方
織新衣居齊服殿則剝天斑駒穿殿堊而投納是時驚動以撻傷身
由此發愠乃入天石窟閉盤戶幽居焉と見えたり、されば山中な
ればそこにある兔の皮を搥にして遊べよ、尊の如きわるさす
るなとにや。

香を採る梅に家見る軒端かな

貞享四年の句なり、笈の小文に見えたり、前書に、ある人興行と
有りて、香をさぐる梅に藏見る軒端哉と有り○笈日記尾張の
部に、防川亭とありて、家見る、と見えたり○笈の小文中に、此時
の文に、師走十日餘り名古屋を出て舊里に入らんとす、とあり、

打寄りて花入さぐれ梅椿

此句は句選再出

防川、尾張人

句兄弟は其角選
寶永七年の粟津ヶ原は
桃隣選、芭蕉翁十七回
忘なり

校訂者云
俳要抄にこの句は湖春
の吟にして道橋大全に
載せられたる旨を記
す、元祿九年遊林編反
故集に、この句を芭蕉
の吟とす

元祿五年十二月廿日即興此句ありて、降り込むまゝの初雪の
宿 彫堂と脇有りて、其角、黄山、桃隣、銀杏、と六吟の歌仙、句兄弟
に見えたり○粟津ヶ原に、松山の銀杏が句の詞書に、此句の季
を尋ね侍れば探梅の句なる山申されけるもはや廿とせ餘り
の夢、下略と見えたり○探梅二字は圓機活法詩學に出でたり、
によきくと帆柱寒き入江哉

何れの年の吟にや未知

三州ほひといふ所にて

梅椿はや咲きつばむ保美の里

何れの年の吟にや未知、笈の小文の頃の吟なるか、然れども紀
行には見えす○桃鏡選の芭蕉翁文集に、此里をほひといふ事
は昔院の御門の賞めさせ給ふ地なるによりて、ほう美といふ

由里人の語り侍るをいづれの文に書きとめたるとも知らず侍れども、いともかしこく覺え侍るまゝ、梅椿早咲ほめん保美の里いらこ崎程近ければ見に行き侍りて、いらこ崎似るものもなし、鷹の聲と見えたり、爰につぼむとは傳寫のたがひか。

雜之部

酒飲み居る人の繪に

月花も無くて酒のむひとり哉

元祿二年の曠野集に、花三十句の内に前書とも此の如く見えたり。○泊船集にも春の部に出でたり。○句選雜の部に出し、又七部搜にも是は雜なりと云へり。

布袋の繪讚

物ほしや袋のうちの月と花

何れの年の吟にや未知。句解に、烏丸光廣卿黄葉集指月布袋の讚に「大空をさしたる指のさきにこそ月雪花も秋の紅葉も」句意よく此歌に通ひて無盡藏の禪味と云べし。○花の古事に、前

文略す、追而申入候其許より出来參候はん袋あまりそこね申候今一つ新しく致度候大さ下地の通りに頼入候則古俗飛脚に登せ申候いづれも宜敷頼入候御内様御世話にて候へども頼み入候依之一句物ほしや俗のうちの月と花いかおぼし候や當座間に合せ候間此句雜にて御座候くはしき事追々可申入候以上 廿三日 杉風丈 ^{イニ松} はせを。

三聖人の圖

月花の是やまことのあるじ達

何れの年の吟にや未知笈日記尾張の部に、書讚とありて前書とも斯く見えたり○梅村載筆に曰、三教吸醋圖何人の書始めたることを知らねども悟心院齋椿庭既に讚をする時は其以前より有りしにや、此事東海瓊筆に記せり○庭の卷集に、贊守武宗鑑貞徳圖と前書有り○案するに、今の世に醋吸の三聖とい

ひならはして釋迦孔子老子の圖あり、依之、三聖人の圖と前書あれば醋吸の三聖にやいまだ詳ならず○唐肅宗皇帝三聖人圖讚儒吾師曰魯仲尼師聃、聃師竺乾、能入無爲法而吾不知稽首正覺吾師師師

かちならば杖つき坂を落馬哉

元祿四年の吟なり、笈の小文に、桑名よりくはで來ぬればといふ日永の里より馬借りて、杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ちぬ、歩行ならば杖つき坂を落馬哉と物うきの餘り云出で侍れども、終に季の言入らずとあり○二十五條に、名所に雜の句之事、名所の發句は都て雜の句も然るべし、名を云ひ季を云ひ心を云ふ時は句作必穩なるまじ、朝よさを誰松島ぞ片心かちならば杖つき坂を落馬哉、蝸牛角ふり分けよ須磨明石、此中須磨明石の句は蠻觸の兩國をたとへ、其境はひわた

日永の里四日市より石薬師の間にあり杖つき川杖つき坂日永の里より石薬師へ行く道にあり
東國名勝志、桑名より食はで來ぬれば星川の朝飯はとく日永なりけり

るなど、云へる言葉より思ひ寄せられたれば、必ずしも蝸牛の當季にもかゝはらず、是等を雜體と云ひて名所の句格式なるべし口傳無季の格といふ下にあり。○古今抄に名所に雜の發句の事いにしへ和歌の撰集にも雜といふ題あれば、雜の體といふも有りて、連俳にも其名を傳へしが、今の俳諧に是を評せば、雜の發句はたま／＼の用にして四季の部立には曲節といふべし、今案するに名所に雜の發句とは一句に其の所の名を出して其風景の情をうつしゝが、又當季を結ばんとせば、姿情は必ず穩なるまじ、一とせ松島の吟行に「あさよさを誰松島ぞ片こゝろ」斯くは申捨てたれど彼の浦山の姿情を盡さず其紀行にももらし侍りしか、其の後武陵より伊賀に歸るとて馬の荷鞍打かへりて「かちならば杖つき坂を落馬哉」此時は道づれの人の「角の」とがらぬ牛もあるもの」といへる取あへぬ脇もありて、昔道沾の連歌にはさる様の戯れも侍りけん、名所の雜は斯くこそと思ひ

にたれ。○去來抄に、卯七日、蕉門に無季の句興行侍るや、去來曰、無季の句は折々あり、興行はいまだ聞かず、先師曰、發句も四季のみならず、戀旅名所離別等無季の句ありたきものなり、されど如何なる故ありて四季のみとは定め置かれけん、其事を知らざれば、しばらく黙止侍るとなり、其無季といふに二つあり、一つは以後表裏季と見るべきもの無し、落馬の即興に「歩行ならば杖つき坂を落馬哉」はせを「何となく柴ふく風もあはれなり」杉風又詞に季無しと雖一句に季と見る所ありて、或は歳旦とも名目とも定むるあり、年々や猿に着せたる猿の面芭蕉君が代に逢ふや狩野家の福祿壽許六斯の如くなり。○又古今抄に、三段切、蚤虱馬の尿つく枕もと、二段切、かちならば杖つき坂を落馬哉、右二章ともに紀行にありて、前は驛路の老懷なれば三段にして論無し、後は彼名所の雜にして論せば二字切に似たれども是等を二段切とや云はん、そのいはれ如何

となれば杖つき坂ならば杖をつきて越ゆべきをと、こゝに一段の詞を返して、馬に乗る故にこそ落馬哉とこゝに二段の心を決す、本より、にをの當用は前をかゝふる詞にて一段の心を廻す爲なれば、此二字をさして切字とはいふべからず、初學はその所にまどふ時あるべし。○師走袋に、是を歩ならば、とよむ故に、古來より季無しの發句と云ひならはせり、此句は、梶櫓は杖突坂を落馬哉、と是落葉の發句を落馬に云紛らしたるなり。○案するに、紀行古今抄去來抄ともに無季の趣なれば師走袋の説取用ひ難し、例の妄説なり。○或行脚の僧の曰く、是にて附合あり、芭蕉の眞蹟の詠艸伊賀の上野に有り、其前書并に脇、佐屋の舟まはりせしに、有明に出で、美濃近江路の山々雪降りかゝりていとをかしきに、恐しく髭はへたる武士の下部などいふもの、稍もすれば船人をねめ怒るにぞ興を失ふ心地せらる、桑名より馬に乗りて、杖つき坂をひきのぼすとて荷鞍かへ

似鳩

りて馬より落ちぬもの、便りなき獨り旅さへ有るにまさなるの乗人やと、馬方には叱られながら、歩行ならば杖つき坂を落馬哉、はせを角のとがらぬ牛もあるもの、土芳。

あさよさを誰まつ島ぞ片心

前にあらはす泊船集に、是は路通がもらひぶりに、句の肉なり、と書出しぬ。○白馬集に、其角が句、朝夜さは猿のうけ取る櫻かなと五文字文字にて有り。○連歌秘傳抄八十體の中に、惜まぬ命ながらへにけりといふ前句に、海士にある身は何事を松島やとあり。○師走袋に、此朝夕とよみて季無しとせり、麻よ棹たれ松しまぞ片心、句の心は竿にかゝりたるを、是は誰を待島布ぞと松島にいひかけて待つと云より、戀の心となして、かた心とは作れり、是を考へずしてむさと季無しの句とする事甚卒忽の至りならずや。○案するに、いづれにも難と見る方穩かな

もらひぶり集見

らん、師走袋の説取るに足らざるは勿論なり○句解に、此句は松島行脚思ひ立ち給へる頃の句なるべし、名所に雑の格なり、朝夜さ句意分らず○説叢に、句選師走袋句解等を難じて曰く、二書とも此句解し得ねばあたりほとりをつゝき散らかしたる甚絶笑す、麻よ棹の如きはもとより、盲者の説毒を後世に流すものなり、戀はるゝ、いづれの季あるや、又雑の句なしと記せしも又偏僻なり、和歌連歌にもあれば俳諧にも何ぞ無からん、よし又無き事にもせよ、翁の器量にて發し給はん、却て國の寶にして拔群の譽なり、是凡才にあらざる故なり、句解に、松島思立ち給へる頃の吟といふも亦不吟味なり、依て古今抄を證とするものなり、馬光日記の内素堂夜話聞書に曰く、あさよさといふ言葉諸人の名所かと思ふらめど、左にあらす、奥羽の方言に、朝をアサ、夜をヨサ、夕をユフサと云なり、朝よさはこゝにて日夜か朝暮旦暮など云心朝夜さなり、さをつけるは鄙の訛り

にて、今諸國にても、夕さ御座れ、夜さに參らう、などいふ皆同じと云々、澹齋云、詞の下にさ文字を添ふる事はあながち訛れるにもあらず、おふささるさと云ひ、行くさ來さともいふ、皆助語なり、此類甚多し、今考ふるに、此句意は、日夜朝暮松島へ行ききたさとのみ思ひ焦るゝは、誰か我を待つ人有らんと、片心にかゝりたるが、今松島へ來て見れば、さして待ちし人も無かりけるよ、さては我風雅に浮かれし念にやとの觀相なり、斯の如くにて顯然たるべし、誰まつしまと風流に云かけて幅を取る所なり、問て云、田舎の訛れる言葉を發句にいれ遣ひてもよきか、答云、此さ文字はあながち訛りとも極め難し、又一向に訛れる詞なりとも其の所々の方言なれば、紀行の句には求めてもすべき事なり、既に清風が許に宿られし時は、我宿にしてねまるなりと、句作りありし、是其所々の詞裁入れて他所へふれ動かせまじき一助ともなりなん、松島の吟行に奥の言葉を入れんに、

澹々云人々の句解笑ふに堪へたり

訛るともいやしむべからず、朝よさにてこそ其所たしかに居り、句意も一しほ深切に聞くべしなり。

芭蕉句選年考 大尾

明治四十四年十二月七日印刷

明治四十四年十二月十日發行

芭蕉句選年考下巻奥付

正價金壹圓五拾錢

校訂者 大野 酒 竹
同 沼波 瓊音

版權所有

發兌

東京市本郷區
森川町麩番地

電話下谷三三二〇番
電話下谷三〇二二番
振替一九四六七番

文成社

發行者 貞金 近松
東京市本郷區森川町一番地

印刷者 平井 登
東京市本所區番場町四番地

特約賣捌

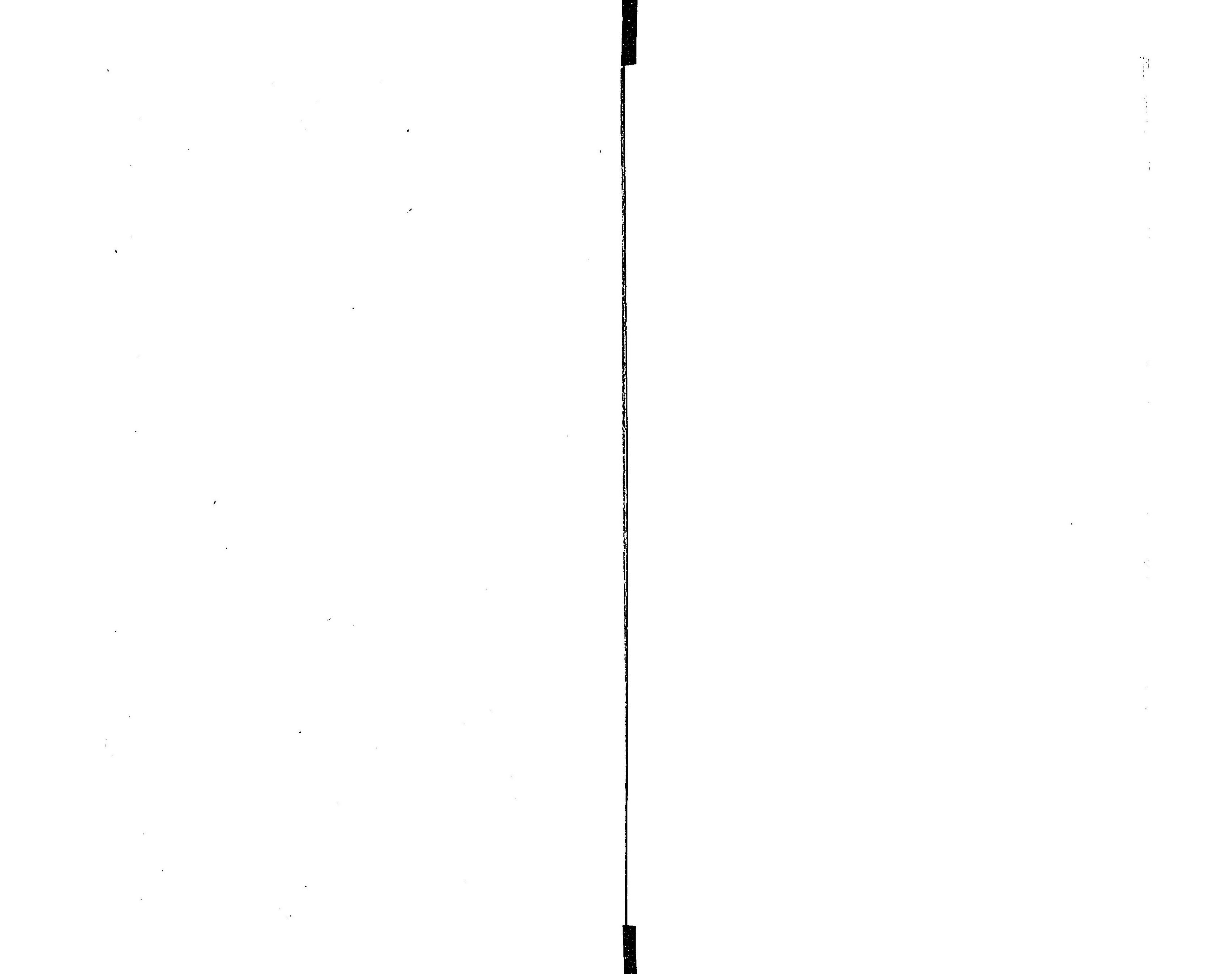
東京市神田區表神保町
大塚區市二七〇番
振替東京市梅田盛文館
振替東京市二八二三番

東京堂書店

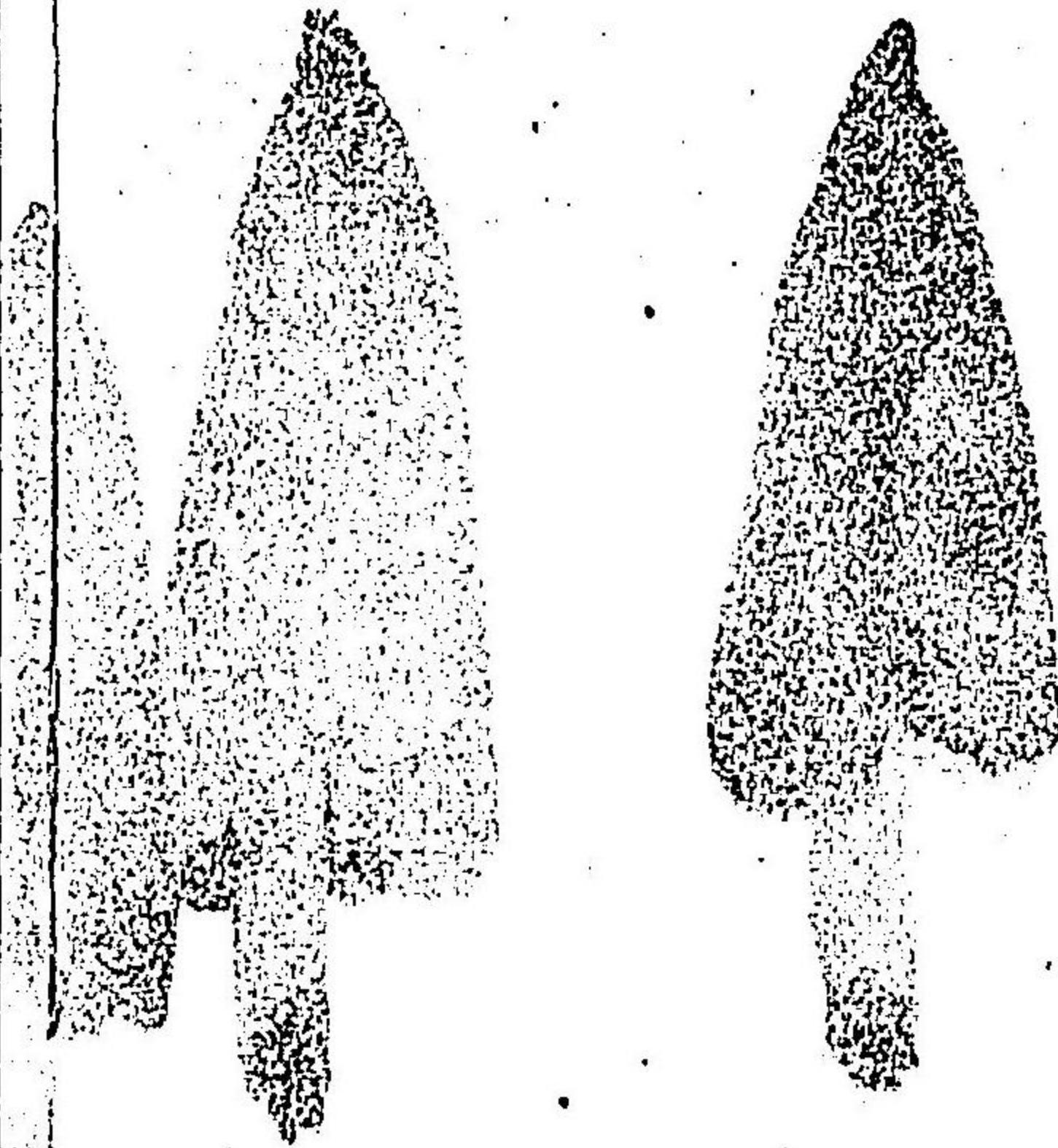
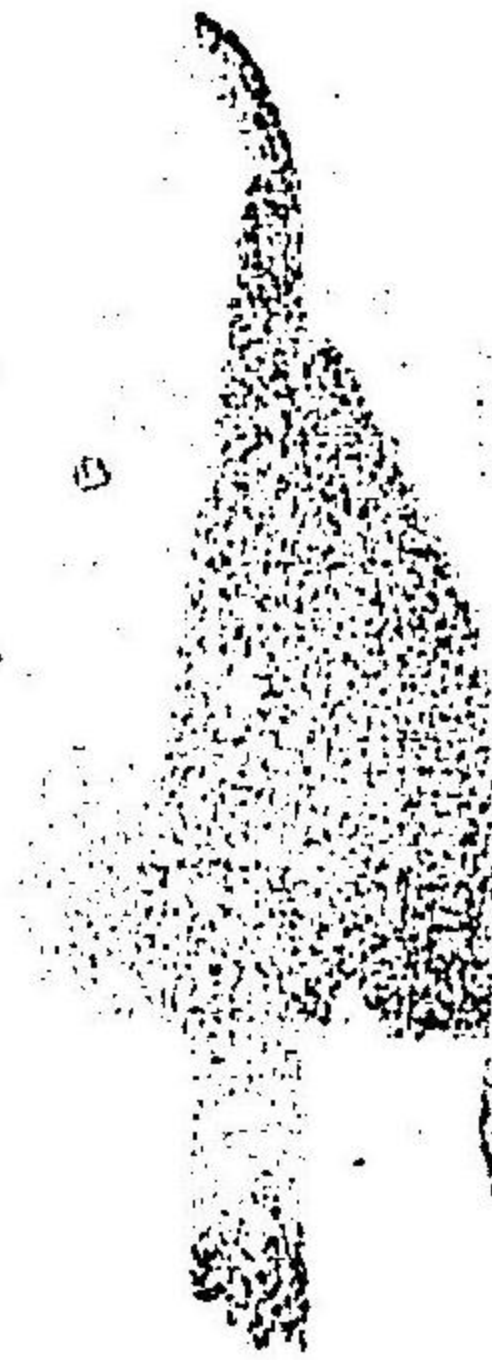
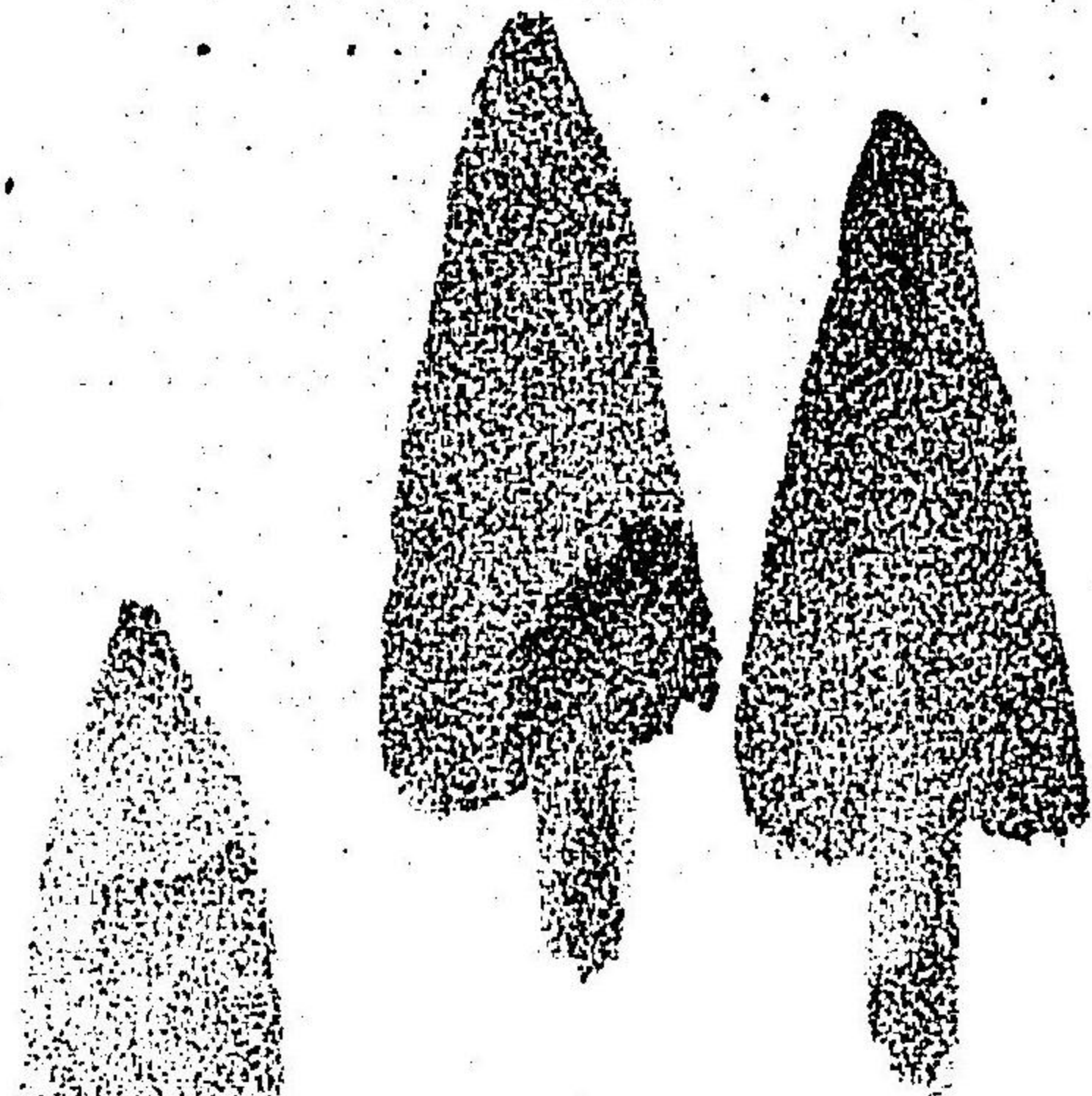
名古屋市中町三丁目
振替東京市五八〇一番
振替大阪三三五七番
福岡縣久留米市米屋町

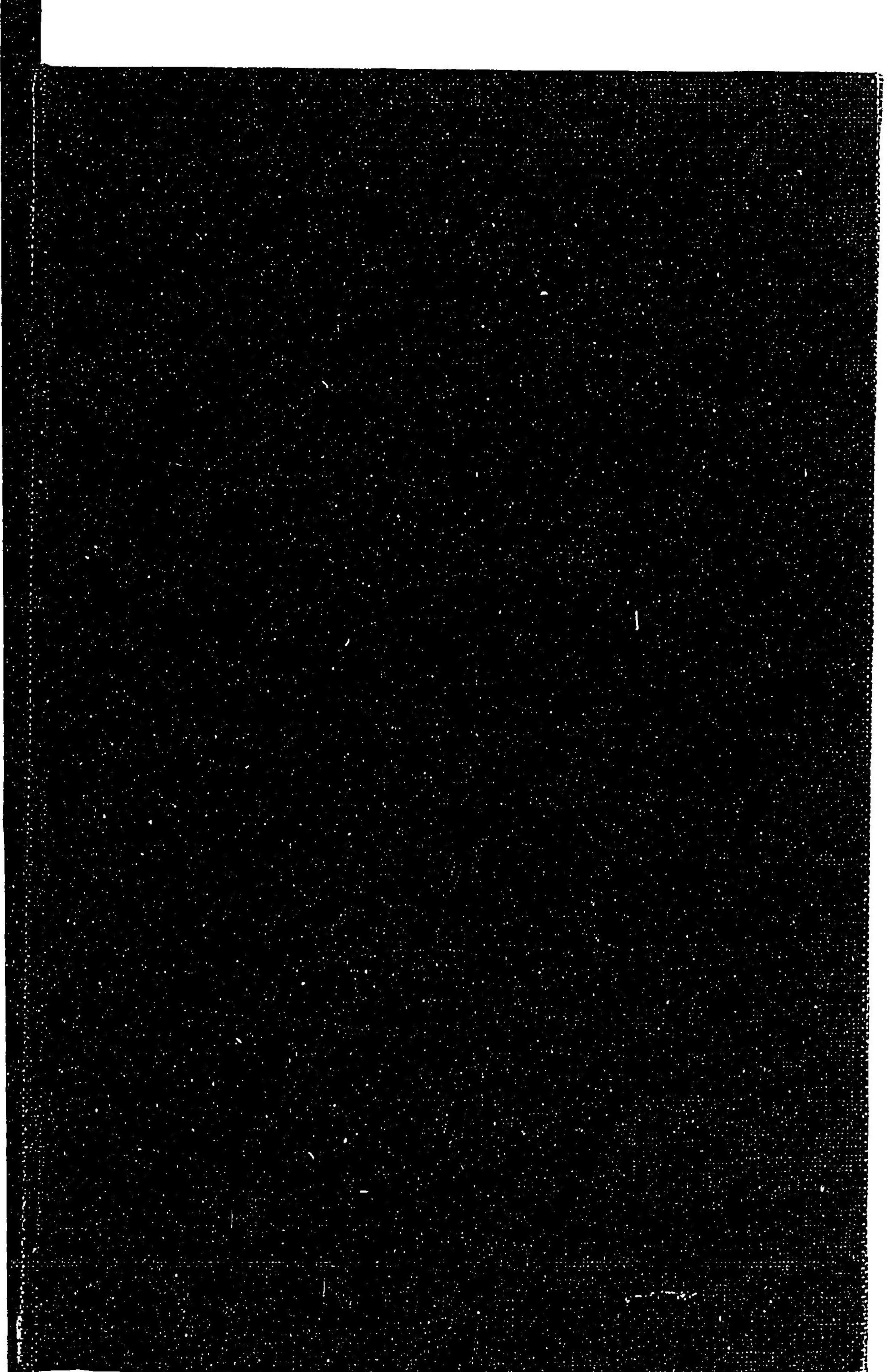
川瀨書店
菊竹金文堂





7N50

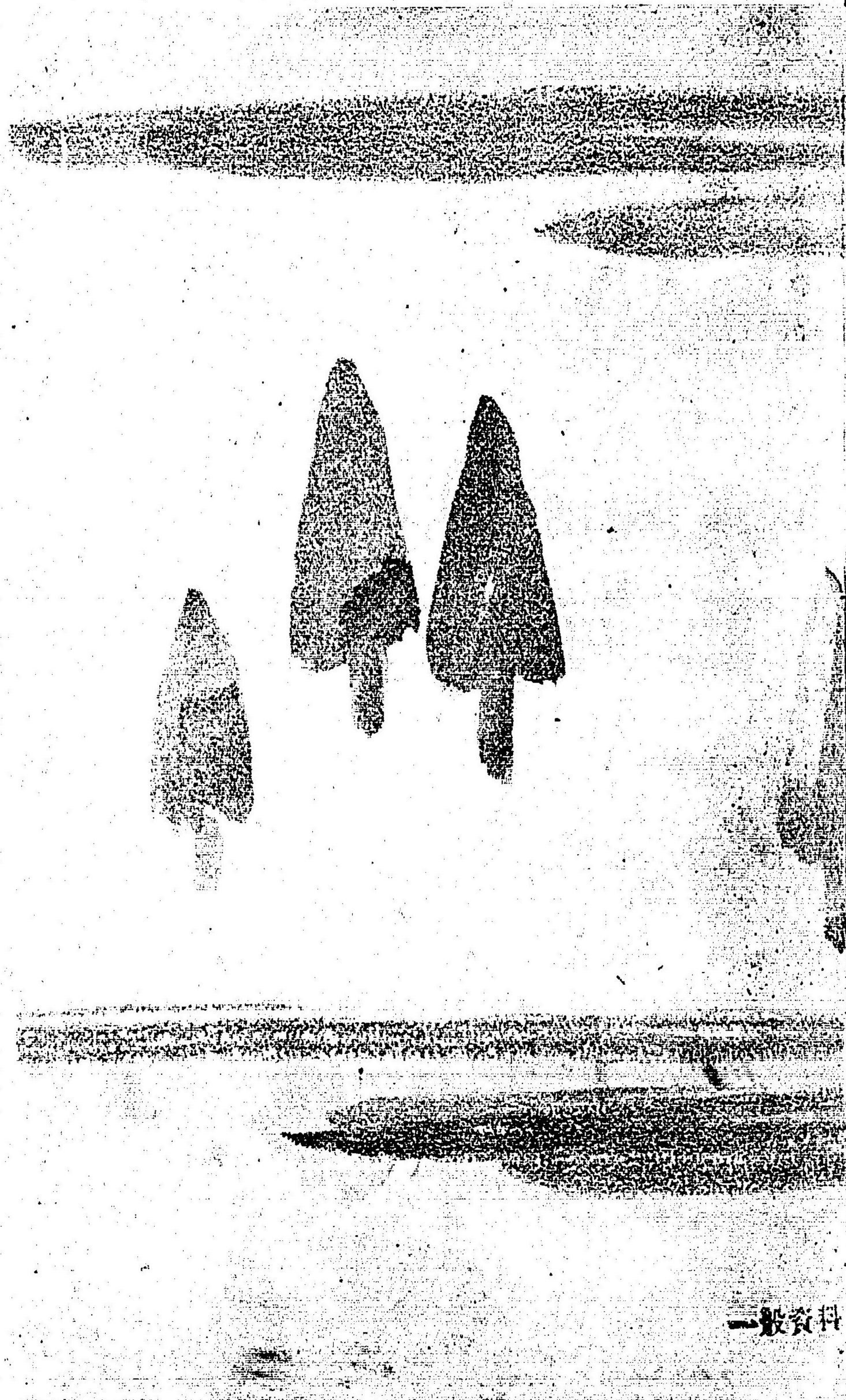




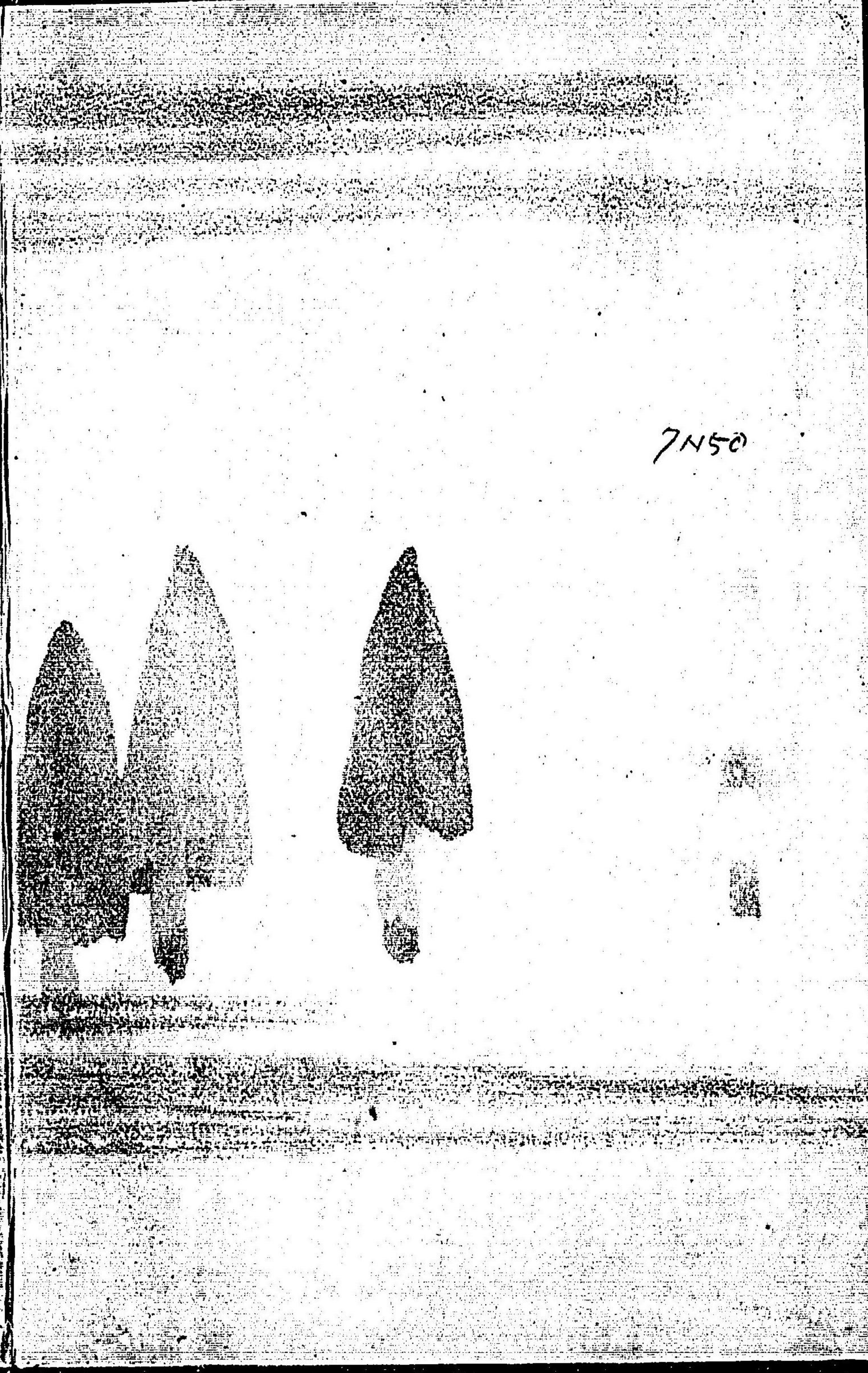
911.32

T642b

0



一般資料



7N50

